

鑑賞サポートがひらく より豊かな劇場の可能性

報告書

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー パートナープログラム
巡回公演における鑑賞サポートの波及に向けた検証

はじめに

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京では、誰もが芸術文化にアクセスし、楽しめる環境を目指すプロジェクト「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」を2021年度より実施しています。その一環として、国内文化施設、NPO、研究機関や文化事業に関わる多様な担い手と連携しながら、文化施設や文化事業のアクセシビリティ向上に関わる調査、検証、モデル開発を「パートナープログラム」と名付け今年度から取り組み始めました。

2023年度の「パートナープログラム」の一つとして、全7都市で取り組んだのが、巡回公演における鑑賞サポートの波及・展開モデルの開発です。

東京芸術劇場では演劇公演の鑑賞サポートとして字幕機や音声ガイドの提供を継続的に行ってききましたが、今回はそうした取組を全国の劇場や地域に波及することのできる鑑賞サポートの在り方について検証・実施しました。

その実施にあたり、事前の準備から実施に至るまでの試行錯誤の過程、初めて鑑賞サポートを行った巡回先の劇場職員との座談会や公演を鑑賞した障害当事者の方との意見交換会など、実施を経て得られた成果をまとめました。

鑑賞サポートの在り方は正解があるわけではなく、この報告書にまとめたプロセスはあくまで様々な選択肢の中から組み合わせた一例ですが、この試みを通して、これから鑑賞サポートに取り組みたいと考える多くの方に鑑賞サポートを知ってもらい、鑑賞サポートを通して地域や市民とつながる「ひらかれた劇場」が広がっていくことを願っています。

東京都

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

もくじ

はじめに	2
もくじ	3
実施概要	4
鑑賞サポートの現状調査	5
パートナープログラムをはじめのうで	6
東京芸術劇場鑑賞サポート担当者座談会	12
鑑賞サポートの実施における連携	15
鑑賞サポート説明会	16
〈制作者の声〉字幕制作の舞台裏	18
〈制作者の声〉音声ガイドの舞台裏	22
鑑賞サポートの東京公演・巡回公演での実施	25
東京公演の鑑賞サポート【字幕機提供編】	26
東京公演の鑑賞サポート【音声ガイド編】	29
巡回公演の鑑賞サポート	32
プログラム全体の振り返り・成果検証	37
『勸進帳』を深める会	38
字幕機利用者の意見交換会	46
鑑賞サポート実施劇場担当者座談会	54
アンケート集計結果	65
東京芸術劇場 木ノ下歌舞伎『勸進帳』字幕機提供	66
東京芸術劇場 木ノ下歌舞伎『勸進帳』音声ガイド	69
巡回公演 木ノ下歌舞伎『勸進帳』字幕機提供	71
巡回公演 木ノ下歌舞伎『勸進帳』音声ガイド	75
まとめ 鑑賞サポートの波及に向けて	77
鑑賞サポートを実現し継続していくために	78
ひらかれた劇場になるための鑑賞サポート	
一芸劇職員の振り返りから	82
おわりに	84

実施概要

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー パートナープログラム 巡回公演における鑑賞サポートの波及に向けた検証

【実施内容】

鑑賞サポートの現状調査

鑑賞サポートの実施における連携

鑑賞サポートの東京公演・巡回公演での実施

プログラム全体の振り返り・成果検証

【劇場】

東京公演

東京芸術劇場 シアターイースト

字幕/音声ガイド

巡回公演

沖縄：那覇文化芸術劇場なはーと 大劇場(特設客席)

字幕

長野：サントミュージゼ(上田市交流文化芸術センター) 大ホール(特設客席)

字幕

岡山：岡山芸術創造劇場ハレノワ 小劇場

字幕

山口：山口情報芸術センター スタジオA

字幕/音声ガイド

茨城：水戸芸術館 ACM劇場

字幕

京都：京都芸術劇場 春秋座(特設客席)

字幕/音声ガイド

【企画・運営】

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

【主催】

東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

鑑賞サポートの現状調査

パートナープログラムをはじめるうえで

東京芸術劇場
鑑賞サポート担当者座談会

パートナープログラムをはじめるうえで

パートナープログラム実施にあたり、まず東京芸術劇場における鑑賞サポートの現状を分析しました。今回のパートナープログラムの企画・運営を担っている東京芸術劇場では、これまで継続して行ってきた鑑賞サポートの在り方について、2つの課題がありました。

1. 内容・コスト等は現状のままが良いか。もっと鑑賞サポートのバリエーションを広げることができないか。
2. 地方を巡回する公演に鑑賞サポートを付帯できないか。

これらの課題に向き合うことを通して、鑑賞サポートの波及・展開モデルの開発を進めていこうと考えました。

今回、鑑賞サポートに積極的に取り組んでいる木ノ下歌舞伎に、連携先として一緒にできないか相談したところ、東京芸術劇場Presents木ノ下歌舞伎『勸進帳』におけるご協力を快く引き受けてくださいました。東京芸術劇場では、鑑賞サポートの制作を外部のパートナーに委託していることから、まずは巡回公演で鑑賞サポートを実施できる事業者の選定を行いました。

また、並行して『勸進帳』巡回公演先の各劇場にも、それぞれの劇場の状況を踏まえ、鑑賞サポートの実施について希望や可能性、劇場の現状を伺いました。こうしたプログラムの事前準備は、以下の流れの通りです。

1 候補となる鑑賞サポート実施パートナーへのヒアリング、鑑賞サポートの現状調査

はじめに、演劇公演等で鑑賞サポートの提供を行っている3つの会社にヒアリングを行いました。

3社とも字幕と音声ガイドの提供を手掛けている事業者で、サービス内容においてそれぞれに特色があり、鑑賞サポートを取り入れる劇場側のニーズによっても、選択が変わることがわかりました。

3社へのヒアリングとサービス内容の検証の結果、演劇公演の鑑賞サポートの現状が見えてきました。

バリアフリー字幕

字幕制作から当日の字幕オペレーションを含め、運営までを担える事業者、当日運営は劇場側で担う必要がある事業者、また、字幕制作自体を劇場で担う必要がある事業者など様々でした。

音声ガイド

劇場にナレーターが来てリアルタイムで音声ガイドを行うだけではなく、劇場に来なくても遠方からナレーターが映像を見て、リアルタイムで解説するやり方を取り入れている事業者もありました。テクノロジーの進化と今後の普及の可能性が感じられました。

価格

当事者を交えたモニター会を実施する等、制作過程が丁寧な分、価格が高い事業者がある一方で、劇場側が担う業務量を増やすと価格が安くなる事業者もあり、3社それぞれに価格設定が異なりました。

また、機材のレンタル期間内は何度でも字幕機の使用が可能のため、お客様の希望する公演日に実施ができる、端末の台数の追加に柔軟に対応できる等、3社それぞれ様々な特徴や違いがわかりました。

事業者選定の際には、会場の環境や作品の内容、運営側の状況、お客様の特性等を鑑みて、鑑賞サポートを行う目的を明確にすることが大切です。今回は、巡回先の現場担当者が初めて実施する鑑賞サポートに安心して取り組めるよう、始まりから終わりまで伴走していただける点が選定の大きな理由となり、最終的に、字幕制作から字幕機、音声ガイドの提供、当日のオペレーションまで一任できる事業者に委託しました。

2 鑑賞サポート実施パートナーとの連携

鑑賞サポートの実施に向けた情報共有

(株)イヤホンガイドより巡回先の各劇場の担当職員・技術スタッフに向けて、鑑賞サポートの実施に向けた資料を提供いただきました。

また、各劇場の図面等の情報を(株)イヤホンガイドに共有、劇場職員からの確認事項、テクニカル面は、(株)イヤホンガイドのオペレーターと各劇場担当者として直接やりとりしてもらいながら準備を進めました。

芸劇担当者のつぶやき 「劇場の構造確認から」 ※芸劇=東京芸術劇場の略称

資料を見て、音声ガイドの実施を計画していた劇場の一つが、劇場の構造上実施が難しいことが判明。(株)イヤホンガイドのオペレーターにも確認していただき、今回は実施を見合わせるようになりました。

私たち芸劇の職員には各劇場の構造がわからないので、(株)イヤホンガイドのオペレーターが各劇場の担当者や技術スタッフと事前の確認から一緒に進めていただけたことが、大きな安心につながりました。

また、実施を計画していた劇場側も、どういう問題が原因で実施ができないのかを把握できたため、ハードの問題点を解決できる鑑賞サポートの在り方を模索するよい機会になったのではないかと思います。(たとえば、将来的に他社の遠隔音声ガイド技術を使うなど)

実施した鑑賞サポートについて

字幕機 G-marc ATシステム

- コンテンツやアプリがプリセットされた専用タブレット端末を貸し出し、必要な人だけが見られるようにした字幕表示システム
- 舞台の進行に合わせて、演者のセリフや効果音、BGMなどがタイミングよく字幕で表示される
- 人の耳に聞こえない周波数帯の「非可聴音」を使って端末に字幕を表示する
- オペレーターが音の信号を送りタブレットのマイクが認識することにより、端末上の字幕を自動的に切り替える仕組みのため、利用者は観劇中に操作をする必要がない



字幕機を手で持たずに観劇できるよう、字幕スタンドを導入(東京芸術劇場の器材。東京公演のみ使用)

音声ガイド

- 音声ガイド端末(受信機)と専用イヤホン(片耳)を貸し出し、必要な人に音声によるガイドを届けるシステム
- 舞台の進行に合わせて、ナレーターがあらすじやみどころ、演者の動きや表情、舞台上の視覚情報等をリアルタイムで解説する
- 客席内に持ち込みの送信機材・アンテナを設置し、音声ガイドを送信する
- 劇場内外を問わずあらゆるロケーションに対応できる



情報提供:(株)イヤホンガイド

3 巡回先劇場担当者との連携

鑑賞サポートを実施する巡回先6劇場の担当者に事前ヒアリングや説明会を行い、実施に向けての知見を共有し、連携体制を整えました。

3-1 担当者への事前ヒアリング

劇場担当者から鑑賞サポートに関する知識や不安等をヒアリングし、実施パートナーを決める参考にしました。

芸劇担当者のつぶやき 「実施前の準備の重要性」

各劇場へのヒアリングを通じて、劇場によっては、障害者割引の設定がない、手話通訳の派遣を依頼した経験がない、鑑賞サポートを実施したことはないがバリアフリー上映会を行ったことがあるなど状況は様々で、担当者の感覚も経験もそれぞれ異なることに気がつきました。実施するからには、お客様に足を運んでいただくための広報活動も重要ですが、そこまで意識がいないということも。鑑賞サポートを実施する前の様々な準備について共有し、一緒に進めていく意識を持つことの重要性を認識しました。

3-2 鑑賞サポート説明会を実施（詳細は16ページ）

ヒアリングを行った結果、まずは全体への鑑賞サポートの説明が必要だと感じ、巡回先劇場担当者に対する鑑賞サポート説明会を実施しました。

3-3 アンケートの実施と共有

鑑賞サポート説明会終了後に、各劇場の不明点や問題点をアンケートで吸い上げ、その回答を巡回先の全劇場に共有しました。

3-4 実施内容の決定

ヒアリング～鑑賞サポート説明会の時点で、今回の公演でどの鑑賞サポートを行うか検討してもらい、説明会を経て各劇場内で再検討および調整を行い、鑑賞サポートの内容を決定しました。

3-5 東京公演の視察

各劇場で実施する前に東京公演の視察にお越しいただき、各サポートの体験と運営を見学してもらう機会を設けました。

芸劇担当者のつぶやき 「ここで終わらないために、を常に考える」

今回鑑賞サポートを1回やって終わりではなく、これをきっかけに広めていってほしいという思いを常に持ち、各劇場の担当者との連携を深めていきました。「(鑑賞サポートは)特別にやってあげるものではなく、誰もが来られるように環境を整えるのが当然」という考え方にみんながなっていくためにはどうしたらいいだろうと、いまま探索中です。

4

鑑賞サポート(情報保障)の在り方

に関する意見交換会に向けた準備（詳細は46ページ～）

字幕機提供の際にアンケートを実施していますが、字幕を利用する当事者のアンケートだけでは拾えない声や意見をじっくり聞く機会を作りたいと考えました。

演劇が好きな方から劇場にこれまで行ったことがないという方まで(鑑賞サポートがついていなかったために行く機会がなかったということもあるかと思いますが)、劇場での鑑賞における視点や経験も異なる方からお話を伺いたいと考えました。更に、「聞こえ方」は様々なので一人ひとりの経験や考えを話していただくことで、活発な意見交換につながるのではないかと考えました。

今回は、木ノ下歌舞伎『勸進帳』公演で字幕機をご利用いただいた方にご協力いただき、意見交換会を実施しました。

東京芸術劇場 鑑賞サポート担当者座談会

当プロジェクトの企画・運営を担う東京芸術劇場 事業調整係 社会共生担当の3名(三谷淳、多田和代、佐藤宏美)が、プログラム調査検証の段階で気づいたこと等を語り合う時間を設けました。

実施日:2023年5月26日

持続可能な鑑賞サポートのために、 現場に寄り添う

-鑑賞サポート事業者へのヒアリングをする中で気づいたことや、選定の視点について聞かせてください

三谷

これまでも東京芸術劇場での鑑賞サポートは(株)イヤホンガイドに委託して長年一緒に行ってきたのですが、当事者の方にとってより望ましい方法を提供できる場所があるかもしれないという思いから、これまでご一緒していなかった事業者にもヒアリングをしていきました。

多田

ご相談した3社を見ていくと、当日のオペレーションは劇場や劇団側でやるというシステムであること、同行できるとしてもすべての劇場に私たち鑑賞サポートスタッフと一緒に巡回はできないかもしれないということもありました。本当は、全劇場の鑑賞サポートの調整と当日の現場を一括して担当するスタッフがいるか、各劇場に鑑賞サポートの担当者がい

るのが望ましいですが、現状では難しいこともあり、更に今回初めて鑑賞サポートを実施する劇場ばかりの中で、制作から現場まで包括的に見てくれて任せられるところが安心だよ、と。巡り巡って、(株)イヤホンガイドに決まりました。

三谷

現場の負担感が大きいと、次につながっていきにくいと思うんです。一回実施して終わりではなく、これから鑑賞サポートが色々な場で行われていく持続可能な展開につなげていくことが大切だと思うので、そのためにもまずは劇場職員の負担が少ないやり方で、という視点を大切にしました。

鑑賞サポートは磨き育て続けるもの

多田

鑑賞サポートにおいて100パーセントの正解というのはない中で、今後鑑賞サポートが各地に波及していくには何が必要なのか、また鑑賞サポート付き公演を巡回していくうえで何がハードルになるのか。それらについて、今回鑑賞サポートを実施する巡回先の劇場担当者の方々のヒアリングを通して考えることができたのはありがたかったです。

三谷

鑑賞サポートを社会に波及させていくことを目的に置くと、いまの私たちが考える鑑賞サポートの波及方法はこのやり方がベスト。

でも、作品ごとに当事者の方のご意見を伺えて、それが字幕にも反映できたらいいと思いますし、お客様それぞれのスケジュールに合わせていつでも鑑賞サポートを利用できる状況がもちろん望ましいと思います。ただ、見やすい、聞きやすい座席の配慮や、ヒアリングループなど音の補助システムが利用できる席の準備をする必要もあるので、自由に席を選んでもらうことが難しい面もあります。

お客様がご自身に合う選択肢を得られることが大切で、その選択肢をどこまで作っていけるかという意識を持ち続けることが重要なかなと思っています。

公共劇場として。

異なる立場からの選択肢

-当事者の方々の声を大切にしながら、情報保障を担う運営側への配慮も必要だという視点が一貫していると感じます。それはなぜでしょう？

佐藤

私たちが、大変な思いをしてきたからです(笑)
「そうだ大事だよ、一緒にやろう」と思ってくれる人を作るのがどれほど難しかったか。なにか新しいことをしようとするとき、それを必要とする、喜ん

でくれるお客様探しから始めます。これまでの鑑賞サポートの取組みも、たくさん失敗を積み重ねてきました。

今回、鑑賞サポート実施パートナー候補数社にアプローチをして、色々な方法を知る機会をもらいました。私たちは公共劇場であり、お客様から高価な料金を頂戴して舞台を提供する以上、絶対に失敗はできない、いきなり大きな冒険はできないということも明確になったと思います。

初めて鑑賞サポートを取り入れる劇場に紹介もするので、なおのことです。一回失敗しちゃったらもうやろうとは思わないですよ。今回の選択は、持続するための安全策でした。

ほかの事業者もコンセプトが素晴らしく、より簡便にできるものもあり、いい意味のアンチテーゼとして、それが合う場面も様々にあるだろうと思います。状況によって使えるものがそれぞれ違うということです。今の私たちの立ち位置では最善の策をとれていることを再確認できたと感じています。

鑑賞サポートの 実施における連携

鑑賞サポート説明会

〈制作者の声〉
字幕制作の舞台裏
音声ガイドの舞台裏

鑑賞サポート説明会

今回初めて鑑賞サポートを実施する巡回先劇場の担当者に向けて、東京芸術劇場がこれまで培ってきた知見を共有する「鑑賞サポート説明会」を実施しました。巡回先の全ての劇場担当者が参加し、劇場を越えた文化施設の横のつながりをつくる時間にもなりました。

実施日：2023年4月26日(水)

実施方法：オンライン

内容

- 字幕機提供について／字幕制作の流れ
- 音声ガイドについて／音声ガイド制作の流れ
- 鑑賞サポート当日の運営について：準備／開演～終演後
- 座席について
- チケットの販売・申込み／精算・引取りについて
- 広報物について／チラシ・WEB等
- 広報先・集客方法について
- 鑑賞サポートに関わる費用や機材保証などについて

説明会では、巡回先劇場の担当者が感じている課題や不安などを共有し対話する時間も設けました。説明会終了後にアンケートを行い、各劇場からの不明点とその回答を全劇場に共有しました。

巡回先担当者とのQ&A(一部抜粋)

Q 手話通訳の依頼など検討はしますが、我々が筆談でコミュニケーションを取る場合、気を付ける事、手順はありますか？

A 筆談は、紙の場合はA4用紙サインペンや1mm程度の太さのボールペンで書きます。最近は筆談ボードも安価に色々出ていますので、これを機に購入して今後総合案内等で活用していただいても良いかもしれません。内容は文章ではなく、簡潔に要点のみ書くように心がけると伝わりやすいです。

Q 実施当日は、フロントスタッフをいつもより増やした方がいいですか？

A 字幕をご利用の聴覚に障害のある方には客席やお手洗いへの誘導が基本的に不要なので、普段と同じ体制でも問題ないと思います。音声ガイドをご利用の視覚に障害のある方は、お付添の方がいる場合以外は、増員した方が良いでしょう。お付き添いが異性の場合は、お手洗いの案内等をスタッフが行うこともあります。当館の場合は、通常の委託のフロントスタッフは増員せず、チケット精算、引換のみ担当に依頼、誘導等の運営は、3名体制(受付、誘導、貸出し場所やお手洗い案内等のサポート)で10名程度のお客様に対応しています。ホールのキャパシティ、鑑賞サポート利用者人数により変動があります。

フロントスタッフにも鑑賞サポート実施日は、筆談対応やお手洗いの(同性の)案内が必要な可能性があること、どこかの座席に(視覚または聴覚障害の方が)座るかを共有し、避難誘導等の際にわかるようにしておく必要があります。

Q 作品の制作、舞台スタッフと一緒に打ち合わせをする機会が必要だと思いました。前日にも必ず準備・リハーサルが必要ではないでしょうか？

A リハーサルは、本来は各館で行えるのが理想です。今回は全館希望がありスケジュールがタイトになったことと、予算の都合上、各館で実施できなかったのですが、今後の課題として検討させていただきます。

〈制作者の声〉 字幕制作の舞台裏

木ノ下歌舞伎『勸進帳』公演の、鑑賞サポート実施パートナーである(株)イヤホンガイドの高橋さんと佐川さんに、字幕の制作について、また字幕やお客様との接点を通じて気づいたことを聞きました。

お話を聞いた人

株式会社イヤホンガイド 制作部 高橋さおり 営業部 佐川芽生

インタビュー：2023年9月16日(土) / 会場：東京芸術劇場 会議室

-鑑賞サポートを実施する上での、それぞれのご担当業務を教えてください

高橋

私は字幕の制作と、公演当日のオペレーションを担当しています。今日の公演では、技術ギャラリーをお借りして、そこから字幕機に字幕を送るポン出しをしていました。

(株)イヤホンガイドでは、字幕制作とオペレーターを同じ者が行っています。これは、公演を深く理解している人が、リハーサルへの参加から修正まで柔軟に対応していくことが、お客様の観劇環境を整えることにつながっているためです。

弊社ではこれまで、伝統芸能やミュージカルに字幕をつけるなど多様な字幕の活動を行ってきました。その中に今回のバリアフリー字幕も位置付けられているのですが、他の字幕と違うところは、音の情報を台本に足していくことです。公演が変われば課題も変わりますし、毎回勉強の連続ですが、これまで培った経験も合わせて一つひとつ積み重ねていって

いる状況です。

佐川

私は営業部で、お客様に機器をお貸し出しする担当と、劇場に、鑑賞サポートを実施するために台本や映像をご手配いただくなどのやり取りをさせてもらっています。弊社でバリアフリー字幕を実施する時には、制作部と営業部の連携体制で取り組んでいます。

-(株)イヤホンガイドさんで、バリアフリー字幕を始めたのはいつからでしょうか

佐川

2008年から、東京芸術劇場の作品に、字幕をつけるサービスを始めました。そこから継続しながら他劇場にも広まっていった経緯がございます。2016年頃から音声ガイドも始めています。

-今回、木ノ下歌舞伎『勸進帳』公演で、巡回先も含めて鑑賞サポートを実施するという話があった際に、どのように感じましたか？

高橋

これまで予算の問題などもあり、限られた日にちで東京公演だけということが多かったのですが、今回『勸進帳』で巡回先の劇場まで同行できるというのは本当に嬉しいです。色々な方にこの作品をご覧いただきたいというのと、バリアフリーのサービスを作る立場として、それを広げたい気持ちもあるので、やっぱり実際にご利用いただいて、見ていただいてご検討いただく良い形になればなという思いでいます。

-佐川さんは、各地の劇場とのやり取りの中で見えてきたこともあるのではないかと思います

佐川

弊社は元々歌舞伎の音声ガイドの解説サービスをメインで行っており、各地に巡業公演に伺うことも多かったんです。その際に、地方の劇場から「バリアフリーのサービスに興味がある」というお話も伺っていました。でも、各地に行くとなると、どうしても出張費などの費用が重なってくるので、実施が難しい面もありました。なので、今回このような形で巡回公演でも鑑賞サポートが実施されることは私も大変嬉しく思っております。

鑑賞サポートをつける時に、劇場の担当者も初めての機会でお悩まれることがあると思います。たとえば

手話通訳をどう手配したらいいとか、お客様に知っていただくためにどこにお声がけをしたらいいかなど、ご質問をいただくことも多いです。一つひとつクリアしながらやってみて、広げていくことが大事だと思うので、そういった機会になっていけば嬉しいなと思います。

-今回の『勸進帳』の字幕制作で、大変だったことや工夫したことはありますか？

高橋

今回の『勸進帳』に関して、他の公演と違うなと思っているのは、ルビの多さです。やはり古典で山伏問答の部分ですとか、聞き慣れない方も多いと思いますので、ルビの量が他のバリアフリー公演の2~3倍はあったと思います。もともと木ノ下さんの台本にも非常にルビが多かったので、それを参考に入らせていただきました。

それと、『勸進帳』だからという訳ではないのですが、鑑賞サポートを利用されるお客様が、一般のお客様と同じタイミングで笑って感動していただけることを目指したいと思っていますので、台本のカット割りや、聞かせたい部分は文字を少し大きくしたり太字にしたりすることを、意識して作らせていただきました。

映像と演者さんの呼吸や大きく喋っているところを何度もチェックさせていただいて、そこに合わせて調整をしました。今回木ノ下さんにも確認させていただいて、「ここは少し太字にしてください」など意見も得られたので、より舞台のイメージに合った字幕が作れたのではないかなと思っています。

-舞台の字幕作りは、どのタイミングから始まるのでしょうか？

佐川

台本の他に、舞台稽古の段階で映像をお預かりして、字幕を作っていきます。また、本番同様の条件で行う最終リハーサルであるゲネプロも拝見して、その映像もいただいて、映像と、生で見たときの感覚を合わせて字幕を作り込んでいきます。

-今回のようなスタイルで公演に字幕をつける場合、必要となる環境はありますか？

高橋

できれば舞台全体が生で見られる場所と、音で字幕を送り出すきっかけを取るために音が聞こえる場所が適当ですが、そうした条件が整わなくても、どこでもオペレーションをさせていただきます。

-字幕制作に関わる中で、ご自身の視点が変わったことはありますか？

高橋

視点が変わったというよりは、常に変わらないものがより際立ったと個人的には思っています。私個人としては、字幕をバリアフリーではなく舞台を楽しむ一つのツールとして楽しんでいただきたいという気持ちがあります。

舞台に合わせて字幕が出て、音の情報が出て、必要なものがタイミングよく出ている。お客様が当たり

前のように他の皆さんと感動を共有できる場を作るために自分は努力するという軸が、やればやるほど深くなる、強くなると感じています。

佐川

以前は、目の見えない方や耳の聞こえない方が観劇にいらっしゃることをあまり意識できていなかったのですが、字幕に限らずバリアフリー業務に携わって新しい世界を知ることができて、個人的には広がりを感じています。

-鑑賞サポートの取り組みが広がっていくために、これから挑戦したいことなどありましたらお聞かせください

高橋

やっぱりこの事業を、一人でも多くの方に知っていただく、情報を広げることが本当に必要かなと思っています。

私も舞台が好きで、母とも観劇に行くのですが、今舞台を見ている方も高齢になって、たとえば耳が聞こえにくくなって、舞台から遠ざかってしまうのではなくて、いつまでも体が許す限り舞台を楽しめる環境を作っていきたいです。そのためには鑑賞サポートのことを1人でも多くの方に知っていただいて、必要だと思う方がそれを享受できる世界をつくっていききたいです。

佐川

普段貸し出し場所に立っていて、見える方や聞こえ

る方でも「体験してみたい」とお声がけをいただいたりもするんですね。「字幕がついていることがあるんだ」と通り過ぎるお客様がいらっしゃいます。そうやって広がっていくことがとても重要だと思っています。

台数に余りがあれば、貸し出しする劇場もあって、そういったときに「見えていても聞こえていてもこれがあることでより楽しめる」というご感想をいただきます。弊社の歌舞伎の音声ガイドも元々そういうものでして、解説を聞きながら歌舞伎を見するというものなのですが、そこに通じるものがすごくあると思います。

たとえば同じものを有料でどなたにもお貸しして楽しんでいただいたりできれば、費用の面で実施が叶わない劇場でもより広げるしくみにつながるのではないかなと思っています。



〈制作者の声〉 音声ガイドの舞台裏

木ノ下歌舞伎『勸進帳』公演で、音声ガイドの制作とナレーションを担当する、バリアフリーナレーターの持丸さんにお話を聞きました。

お話を聞いた人

バリアフリーナレーター 持丸あい

インタビュー：2023年9月21日(木) / 会場：東京芸術劇場 会議室

-鑑賞サポートの音声ガイドナレーターとは、どのようなお仕事ですか？

持丸

お芝居の状況に合わせて、音を聞くだけではわからない部分を言葉でフォローするお仕事です。

スポーツ実況と違うのは、お客様の感じ取る力を邪魔しないように、というところがあると思います。たとえば、いろんなところで物音がするのも一つの情報になるので、私の声でつぶしすぎないように気をつけます。照明や音楽も、同時多発的にいろんなことが起こる中で、言葉で説明できることは限られています。そのどこを選んで伝えるかを調整しています。

その調整は私一人で行うのではなくて、木ノ下さんをはじめとする木ノ下歌舞伎の皆さんのお力もいますし、モニターやお客様から感想を聞いて、それを反映するというものもしています。様々な調整をしながら、この作品を音で楽しむより良い方法を探っていく仕事だと思います。

-今回、音声ガイドのシナリオはどなたがどのように作ったのでしょうか

持丸

稽古場に数回お邪魔しつつ、本番も数回鑑賞して台本を作っていました。稽古場でチェックするのは演出の言葉です。役者さんに、その笑顔に込められた意味だとか、こういう感じでやってというようなことを言ってらっしゃるんですよね。そうした意図を聞きながら、作品の方向性を確かめています。

本番はそれに映像や照明、音も入るので、どの人をどのパーセンテージでお伝えするかというバランスを使える材料を探しにお稽古に行っています。

-たくさんの時間を費やして作られているのですね

持丸

そうですね。本番に向けて皆さんがどんどんブラッシュアップしているので、数日前の原稿が本番に使えるとは限りません。使える原稿を書くためには、そ

の下準備として、皆さんがどんなゴールを目指しているのかを知っていないと厳しいと思います。

-公演で音声ガイドのナレーションをするときに、必要となる環境はありますか？

持丸

個別になれるお部屋があったらやっぱり嬉しいのですが、客席や舞台裏でやったこともあります。その場合は、役者や一般のお客様にも理解してもらうことも必要です。

一番大切なのは「やろう」と言ってくれる劇場の存在だと思います。工夫をすれば、どこでもできるかもしれないですね。

-今回、木ノ下歌舞伎『勸進帳』公演で、巡回先も含めて鑑賞サポートを実施するという話があった際に、どのように感じましたか？

持丸

演劇に音声ガイドが付くことがまだまだ少ない中で、全国に持っていく作品に音声ガイドを付けてくださるのは本当にうれしいことです。

地方の劇場って、コミュニティの一つになるうとしていいる部分が東京よりも大きいと思うんです。その場に集まった人たちと、わいわい作品をシェアできると、すごく素敵なことですよね。劇場さんが前向きに集客してくださるのもとてもうれしいです。

-音声ガイドのナレーションをする上で課題に感じていることはありますか？

持丸

声だけで伝えられることには限界があると思います。長時間説明をしても、聞く方が疲れてしまって楽しめないということもありますし、逆にナレーションが少なすぎたら印象に残らない場合もありますよね。

鑑賞サポートには色々な種類があって、開演前に私が舞台に立って客席のお客様に舞台装置の説明をすることもあるんです。役者さん自身が自分の役について紹介したり、衣装や小道具を触らせてくれたりすることもあります。

そんな中で、今回のサポートはこれですとお出ししても、やっぱり「あれが欲しかったな」というご意見は必ずあります。それをどの程度、次に活かせるかはいつも悩むところです。素晴らしい取組はたくさんあるのですが、毎回取捨選択の苦しみがあると感じています。

-与えられた条件の中で試行錯誤をされているのですね

持丸

そうですね。特に東京のお客様は観劇に慣れていらっしゃる方が多いので、落ち着いて聞いて理解してくださることが多いと思います。地方に行くと、「劇場に来たのが初めてです」とか「生きているうちにこんなサポートが受けられるなんて」とおっしゃる方もいます。そういった方に対して、東京と同じ作り方をしてしまうと失敗することもあるんです。

私は、障害のある人が劇場に来て一番思っほしくないのは、寂しくなってしまうことです。情報が保障

されていないからとか、アクセスが悪いからとか、色々な理由があると思うんですけど。なので、どこのレベルで(音声ガイドを)作るかというのはいつも悩ましく、鋭い方には物足りないかもしれないけれど、小学生でもわかるくらいの表現を心がけると、寂しい思いをする人が少なくなるんじゃないかなと思って作っています。

-音声ガイドに関わる中で、ご自身の視点が変わったことはありますか？

持丸

「伝える」という考え方が本当に変わりました。もともとナレーションや声優など、伝える仕事はしていたのですが、ただ読む、表現するだけでは駄目だなということが身に染みてわかりました。

言葉の伝え方もですが、集客の仕方もそうですし、劇場に来たときに不安に思わないようなお声がけも必要です。伝えることの周りにあるものもすごく大事だと感じています。

一つの作品に鑑賞サポートをつけてお芝居を伝えるというのは、本当に大変なことだと思うんです。劇場、一般のお客様、障害のある当事者の方それぞれの理解を得ないといけません。それを持続させている劇場にも木ノ下歌舞伎にも頭が下がります。応援していきたいなと思っています。



鑑賞サポートの 東京公演・巡回公演での実施

東京公演の鑑賞サポート
【字幕機提供編】【音声ガイド編】

巡回公演の鑑賞サポート

東京公演の鑑賞サポート 【字幕機提供編】

東京芸術劇場Presents 木ノ下歌舞伎『勸進帳』東京公演で行われた鑑賞サポート【字幕機提供編】当日の様子をご紹介します。

概要・実績

[東京公演] 9月1日(金)～9月24日(日) / 会場:東京芸術劇場 シアターイースト

字幕機提供実施日

2023年9月16日(土)13時開演

2023年9月20日(水)19時開演

利用者数:2日間計14名(介助者含む)

※ヒアリンググループ作動

※手話通訳の対応あり

ご案内の流れ

1. 受付:ポータブル字幕機の貸し出し
2. 開演:字幕の表示
3. 終演:機器の返却

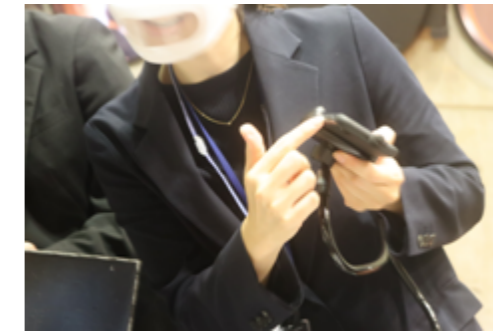
1. 受付:ポータブル字幕機の貸し出し

開演の30分前からお客様をロビーにご案内し、受付でポータブル字幕機の貸し出しと、ご利用案内、パンフレット、アンケートの配布を行いました。
お客様には、受付の流れや鑑賞サポートの概要について事前にメールにてご案内しています。

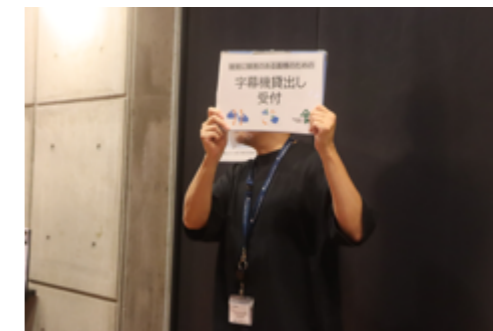


ご案内時には、受付担当やスタッフは口元が見える透明マスクを着用し、お客様のコミュニケーション方法に合わせて手話通訳、筆談での要約筆記によるご案内を行いました。

ご利用案内の説明時には、ポータブル字幕機の実物を触りながら、直感的に伝わる説明を心がけ、資料の該当箇所を指差して説明しました。



一般のお客様に鑑賞サポート付きの公演であることを知っていただくため、受付窓口やロビー等の各所に鑑賞サポートの案内を掲示しました。



2. 開演：字幕の表示

右の画像は貸し出された字幕機です。

上演中、客席内は暗くなりますが、暗いところでも文字が見やすい明るさに設定されており、同時に周囲からは画面が暗く見えるよう遮光フィルムが貼られています。

舞台上の効果音や物音、役者のセリフに合わせてタイミングよく字幕がポータブル字幕機に表示されます。

上演中は自動的に字幕が切り替わります。

『勸進帳』東京公演では、座席のひじ掛けに取り付けたアームスタンドに字幕機を装着しています。お客様それぞれの見やすい角度に調整ができ、字幕機を持たずに観劇できるので身体的な負担が少なかったという声をいただきました。



3. 終演：機器の返却

終演後はロビーでポータブル字幕機を返却していただきます。

ポータブル字幕機利用者からの声

今回の公演を観劇する理由や目的について伺いました(観劇前にヒアリング)

「劇場関係の方からの案内で字幕機が利用できることを知りました。演劇に字幕が付くのを体験するのは初めてです。自分は中途失聴で、手話があまり得意でないので、字幕での観劇に興味を持ちました」

「最近はお芝居に字幕が付くことが増えてきたので、以前よりも内容をしっかりと把握しやすくなって嬉しいです」

「昔から木ノ下歌舞伎が気になっていたのですが、字幕対応の日が合わず、今回初体験です。勸進帳というストーリーは知っているのですが、字幕ありで見るとどんな発見があるのか楽しみです」

東京公演の鑑賞サポート 【音声ガイド編】

東京芸術劇場Presents 木ノ下歌舞伎『勸進帳』東京公演で行われた鑑賞サポート【音声ガイド編】当日の様子をご紹介します。

概要・実績

[東京公演] 9月1日(金)～9月24日(日) / 会場:東京芸術劇場 シアターイースト

音声ガイド実施日

2023年9月17日(日)13時開演

2023年9月21日(木)13時開演

利用者数:2日間計26名(介助者含む)

ご案内の流れ

1. 受付：音声ガイド機器の貸し出し
2. 事前説明：機器の使用方法、劇場内の案内等
3. 放送開始：公演の基礎情報の案内等
4. 開演：リアルタイム音声ガイド
5. 終演：機器の返却

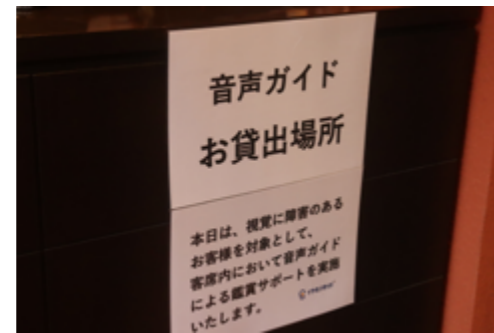
1. 受付：音声ガイド機器の貸し出し

開演の1時間前(一般のお客様の開場前)に、お客様をロビーにご案内し、音声ガイド機器の貸し出しと、機器の使用説明、パンフレット、アンケートの配布を行いました。お客様には、受付の流れや鑑賞サポートの概要について事前にメールや電話にてご案内しています。

視覚に障害のあるご本人だけでなく、同行の方にも機器の貸し出しの希望を伺い、一緒に音声ガイドを楽しんでいただけるようにしています。



一般のお客様に鑑賞サポート付きの公演であることを知っていただくため、劇場入り口、ロビー等の各所に鑑賞サポートの案内を掲示しました。



2. 事前説明：機器の使用方法、劇場内の案内等

音声ガイドを利用するお客様に、機器の使用に関するご案内と注意事項を説明しました。上演時間や休憩の有無、トイレなど劇場内の案内、放送開始時間と返却についてなどのお知らせもあわせて行います。「音声ガイド機器の正面下にボタンが3つ横に並び、凸凹シールが付いています。中央のボタンは電源ボタンです」「左右のボタンが、音量調節のボタンです。左を押すと音が小さくなります。右を押すと音が大きくなります」など、説明の仕方にも配慮しています。



説明後、実際に音声ガイド機器を触ってイヤホンを装着していただき、流れている音楽が聞こえるかの確認を行います。

本公演の音声ガイドのナレーターを担当する持丸あいさんから、「皆さまがストレスなく演劇を楽しめるようサポートさせていただきます」とご挨拶。



3. 放送開始：公演の基礎情報の案内等

開演の13分前から、音声ガイドの放送が始まります。木ノ下歌舞伎『勸進帳』を楽しむための歌舞伎についての知識や、舞台装置、登場人物の説明、あらすじなどをお伝えしていきます。

今回は主宰の木ノ下裕一さんも声で登場し、『勸進帳』の楽しみ方を解説してくれました。



4. 開演：リアルタイム音声ガイド

上演中は、舞台上での出来事や役者の動き、セリフに合わせて、音声による解説がリアルタイムで行われます。イヤホンは片耳に装着する形なので、舞台上の音も自然にもう一方の耳から入ってくるようになっています。

5. 終演：機器の返却

終演後はロビーで音声ガイド機器を返却していただきます。

音声ガイド利用者からの声

今回の公演を観劇する理由や目的について伺いました(観劇前にヒアリング)

「視覚障害者の情報交換メーリングリストで今回の鑑賞サポートを知りました。音声ガイドの鑑賞サポート付き演劇は初めてです。木ノ下さんのラジオ番組「おしゃべりな古典教室(NHK)」をいつも聞いているので、行ってみたいと思って申し込んでみました。テレビでも無言のシーンとか、何が起きているのかわからないときがあります。こういうサポートがあるのって、すごくうれしいです」

「たまたま日本点字図書館からのお知らせで知って、音声ガイド付きで舞台を見るのは初めてなのでおもしろそうだなと思って、実際に感じてみたいと体験目的で来ました」

「歌舞伎座で古典歌舞伎は見たことがあるのですが、やっぱり音声ガイドがないとよく理解できなくて。今回は現代歌舞伎ということで、どんな違いがあるのか興味もあって、見てみようと思いました」

「今回は聞こえない方への字幕もあると教えてもらいました。見えない自分たちだけ特別なかなと思っちゃうので、他の障害のある人にも色々な取組をされていると知ることができてうれしいです」

巡回公演の鑑賞サポート

木ノ下歌舞伎『勸進帳』公演の全国6巡回先劇場で実施した鑑賞サポートの概要・実績と劇場スタッフ、利用者の声（詳細は末尾アンケートページを参照）を紹介します。

01 沖縄公演 字幕機提供

公演日程：2023年9月29日(金)～10月1日(日)
 会場：那覇文化芸術劇場なはーと 大劇場(特設客席)
 字幕機提供実施日：10月1日(日)14時開演
 利用者数：7名(その他取材関係者、劇場職員3名利用)

劇場職員の感想

もともと劇場としてバリアフリーに取り組んでいたこともあり、劇場スタッフからの反応は良かったと思います。障害があってもこうした取組により、公演を楽しめる方が増えるという事を改めて実感しました。

利用者からの声

- 良質な観劇体験は、心に栄養が満たされていくような気持ちになります。沖縄でも観劇サポートが進んだ文化施設になはーとがなってほしいです
- このような機会をもっとろう・難聴者に周知するべきだと思います



02 上田公演 字幕機提供

公演日程：2023年10月7日(土)・8日(日)
 会場：サントミュージゼ(上田市交流文化芸術センター) 大ホール(特設客席)
 字幕機提供実施日：10月7日(土)13時開演
 利用者数：10名(その他市福祉課1名利用)
 ※手話通訳の対応あり

劇場職員の感想

公演終了後に、木ノ下さん、キャストの皆様と、鑑賞サポートにご参加いただいた皆様とが、交流を行っていたことが印象的でした。障がいをお持ちの方々にとって、劇場に足を運ぶことは、「公演を鑑賞する」一片的な行為ではなく、「つどい」「共に共感し」「互いの感想を語り」「笑顔を交わす」という複合的要素が多分に発生することなのだと思感いたしました。鑑賞時のサポートだけではなく鑑賞後の対応も大切なことなのだ気づく場面でした。また、「初めての取組でとても参考になった」という劇場内からの声もありました。



利用者からの声

- 舞台がすぐ目の前にあり、出演者の顔がはっきりわかるのは初めてでした。音楽の代わりに振動も身体に響いてよかったです
- スタッフ対応が丁寧でした。ありがとうございました
- 一般の方と同じ空間で、一緒に鑑賞サポートを通じて観劇できたことが何より嬉しかったです

03 岡山公演 字幕機提供

公演日程：2023年10月14日(土)・15日(日)
 会場：岡山芸術創造劇場 ハレノワ 小劇場
 字幕機提供実施日：10月14日(土)18時開演
 利用者数：5名
 ※ヒアリングループの設置
 ※要約筆記の対応あり

劇場職員の感想

他公演(歌舞伎、沖縄舞踊)でも字幕サポートがあったので身近に感じられました。字幕機を提供したから鑑賞サポートが整うわけではなく、告知からご来場の動線づくり、受付からお帰りまで一連のサポートが必要だということ学びました。



利用者からの声

- 今回初めて字幕のサポートを受け、観劇することができてとても嬉しく思います。目で楽しむことに加え、文字でも情報が得られて内容が理解できたように思います。本当に感謝です
- この取組を広げてください。いろんな舞台が見たいです

04 山口公演 字幕機提供／音声ガイド

公演日程：2023年10月21日(土)・22日(日)
 会場：山口情報芸術センター スタジオA
 字幕機提供実施日：10月21日(土)19時開演
 利用者数：9名(その他、障害者支援関係者1名利用)
 ※手話通訳、要約筆記の対応あり
 音声ガイド実施日：10月22日(日)14時開演
 利用者数：7名(介助者含む、その他自治体関係者3名利用)

劇場職員の感想

今後の当館でのトークイベントなどで、積極的に要約筆記を導入していこうという動きにつながりました。障害を持つご利用者を受け入れていくために、今後、職員研修(防災訓練含む)を実施予定です。今回、障害のある方に向けた取組を実施して、職員内での社会包摂的な意識が高まったと思います。

地方単独では難しい舞台作品への字幕、音声ガイド付き公演を巡回公演でも実施していただき、大変貴重な機会となりました。

観劇体験はもちろんですが、大勢の方々と同じ空間で同じ体験をすること自体に喜びや意義を感じてくださったのが印象的でした。セリフの少ない身体表現性の高い公演等、公演内容によっては丁寧にご案内をするなど継続した取組を行っていきたいと思います。

利用者からの声

- 臨場感が溢れていてとても素晴らしかったです(字幕利用者)
- 今までにない舞台構成と副音声(音声ガイド)がついていると思いました。これから副音声付きの舞台を増やしてほしいです。また見てみたいです(音声ガイド利用者)



字幕機提供の様子



音声ガイドご案内の様子



山口公演での手話通訳と日本語字幕が付いたアフタートークの様子

05 水戸公演 字幕機提供

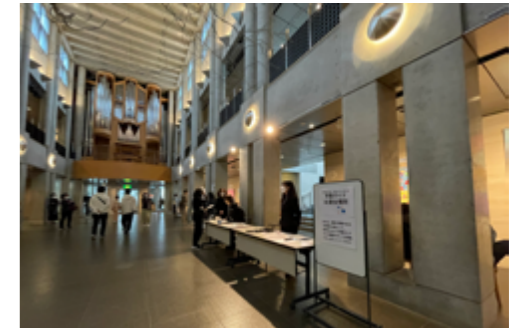
公演日程：2023年10月27日(金)・28日(土)
 会場：水戸芸術館 ACM劇場
 字幕機提供実施日：10月28日(土)14時開演
 利用者数：1名(その他劇場職員3名利用)

劇場職員の感想

アクセシビリティへの第一歩として、お客様へ提供する義務を感じました。今回担当しなかった劇場職員からも、今後の導入を検討することを促されました。

利用者からの声

- セリフが文字で現れるので明瞭になり、理解が増しました。しかし、セリフは身体性を伴うものなので、文字では伝わりきれず、やはり肉体を通した声が、見る人に働きかけて魅了すると感じました



06 京都公演 字幕機提供／音声ガイド

公演日程：2023年11月4日(土)・5日(日)
 会場：京都芸術劇場 春秋座(特設客席)
 字幕機提供実施日：11月4日(土)14時開演
 利用者数：5名(その他海外の方1名、劇場職員2名利用)
 ※手話通訳の対応あり
 音声ガイド実施日：11月5日(日)14時開演
 利用者数：3名(介助者1名含む、その他劇場職員3名利用)

劇場職員の感想

ポータブル字幕機提供に関しては、掲示のデザイン、設置位置等、わかりやすく伝えるための工夫がもっと出来ると思いました。音声ガイドは、視覚障害を持つ方に接する機会がこれまでなかったため、お声がけや、ご案内方法等、気を付けるポイントを改めて学ぶことが出来たと思います。劇場職員も、字幕機・音声ガイドを体験し、感想をシェアしました。鑑賞体験としても新鮮で、作品

の捉え方が変わることに気づきました。鑑賞サポートを通して、劇場や鑑賞環境について改めて見直す機会を得たと感じています。

利用者からの声

- ぜひ続けてほしいです!ファンになりました!次もあれば、友人や知人にもっと呼びかけたいです(字幕利用者)
- 初めての歌舞伎です。表情の説明が助かりました。場内アナウンスの時に「一度止まります」などの案内もあり、気持ちよかったです。音声ガイドの取組を続けてほしいと思います(音声ガイド利用者)



字幕機提供の様子



音声ガイドご案内の様子

プログラム全体の 振り返り・成果検証

『勸進帳』を深める会

字幕機利用者の意見交換会

鑑賞サポート実施劇場担当者座談会

『勸進帳』を深める会

木ノ下歌舞伎『勸進帳』東京公演終了後に、鑑賞サポートを利用して公演を観劇した方々と、木ノ下歌舞伎主宰の木ノ下裕一氏による「勸進帳を深める会」を開催しました。

東京芸術劇場では、以前から鑑賞サポートだけでは伝わらない作品解説や、アンケートでは得られない鑑賞サポート利用者の生の声を聞く機会を設けたいと考えており、今回木ノ下さんに劇場の想いを伝えたところ、快く引き受けていただきました。

木ノ下さんから演出意図の解説や舞台裏のお話、お客様からは感想や質問をいただき、作品の理解を深めていく機会となりました。

「勸進帳を深める会」は、【字幕機提供】と【音声ガイド】を実施した公演で1回ずつ行いました。各回の様子を、ここでは鑑賞サポートに焦点を当ててレポートします。

勸進帳を深める会 【字幕機提供編】（聞こえない・聞こえづらいお客様対象）



実施日：2023年9月16日(土)公演終了後 / 会場：東京芸術劇場 シアターイースト

情報保障：手話通訳、字幕(UDトーク)

鑑賞サポートを実施する中で 覚えた手話

木ノ下裕一(以下、木ノ下)

木ノ下歌舞伎では、2020年頃から聴覚や視覚に障害のある方にも作品を楽しんでいただきたいと思い、鑑賞サポートに取り組んでいます。

その中で、自分も本当に少しずつですが、手話を覚え始めました。せっかくの機会なので、ちょっと手話で自己紹介をしてみようかなと思っております。

(手話で)“はじめまして。木ノ下裕一と申します。木ノ下歌舞伎の主宰です。私は和歌山県で生まれました。現在は京都に住んでおります。手話を少し勉強中です。本日は皆さま大勢の方にご来場いただきまして、嬉しく思っております。ありがとうございます”

-場内から両手を上げひらひらと揺らす手話の拍手-

今回、『勸進帳』という演目なのですが、歴史的な文脈を踏まえつつ、古典の歌舞伎版の勸進帳に忠実にやっています。順番やセリフが現代口語訳になっているので、内容が少しわかりやすくなっていると思います。それでは、感想でもなんでも、いただけたらと思います。

目には見えない“声”の表現を どのように読み解くか

参加者

字幕を見ながら鑑賞して、音楽(ラップ)が流れてく

るところに感動して涙が出てきそうでした。弁慶、すごくかっこよかったんですけど、外国の方が出演されていましたよね。義経は、女性が演じられているのかなと。私は難聴で声があまり聞こえないので、字幕の通りに見ていましたが、外国の方の少し特徴的な話し方ですとか、義経は声のトーンは低いのかなとか、その辺りをどんなふうに見たらいいのかな、と思いました。

木ノ下

ありがとうございます。まず弁慶を演じてくださったのは、リー5世さんという俳優です。関西在住のアメリカ人の俳優さんで、もう20年以上日本に住んでいます。日本語はすごくペラペラなのですが、関西弁なんです。今回の弁慶のキャラクターと関西弁が非常に合うんじゃないかということで、リー5世さんにもあえて関西弁で演じてもらっています。リー5世さんのあのすごく大きな体、いかめしい姿と、関西弁のコミカルさのギャップが、弁慶の強くてユーモアのあるキャラクターを表現する上での大きな魅力になっていると思います。

義経を演じてくださった高山のえみさんという女優は、すごく美しい方ですけども、今回の演技ではとても強く強い声もお出しになります。義経という人物も、日本の古典ではすごく美しい女性的な部分を持ちながら勇ましいところもある、貴公子といえますか、王子様のようなオーラをまとったキャラクターです。そういうキャラクターを高山さんはすごく体現してくださっていると思っています。

※ 弁慶・義経・富樫等の名称は、『勸進帳』の舞台の登場人物

鑑賞サポートの挑戦は続く

参加者

らう者です。木ノ下歌舞伎の『勸進帳』は今回で2回目なのですが、以前は貸し出し台本を読んでから観劇していました。でも、舞台上で出演者が役割を交代して何かをやっているというくらいしかわからなかったんです。今回は字幕がついて、何が何を、誰が誰にといったことがはっきりと、全部理解できました。

木ノ下

鑑賞サポートをする前の木ノ下歌舞伎では、台本貸し出しをやっていたんですね。今、発言して下さったお客様は、その頃から見てくださっているんです。台本貸し出しは、事前に台本を家で読んでいただくのですが、全部を覚えられるわけではないでしょうし、今どこの場面かというのはなかなか難しいと思います。それでもずっと木ノ下歌舞伎の作品を見てくださっていて、本当にありがたいなと思います。字幕ができるようになって、作品の解像度が高まり、理解できる場所が増えたのだとしたら、とても嬉しいです。

けれど、きっとこれは正解がないんだろうなというふうにもやりながら思っています。たとえば、文字よりも手話のほうが伝わりやすいろう者の方もいらっしゃるでしょうし、字幕ももっと大きい画面で大きな字で見たいと言う方もいれば、もっと長文をいっぺんに読んで、できるだけ舞台を長く見たい方もいらっしゃると思います。お客様にもいろんな特性があるのだと思うんです。なので、一つのことをやったか

らとって、全ての方の希望に答えられないのだろうと。でも、やっぱりやらないよりはやったほうがいいだろうし、皆さんにご意見をもらいながら、いろんな形のサポートに挑戦していきたいと思います。

木ノ下歌舞伎では前回までは、アニメーション字幕を作っていました。文字が大きくなったり動いたり、登場人物の写真が出てきたり、漫画の吹き出しみたいになったり。今回は、よりシンプルな字幕に挑戦してみました。それもきっとお好みがあると思うんですけども、できるだけいろんなタイプの字幕、いろんなタイプのサポートをこれからもやっていて、自分たちのベストを探っていきたいです。

みんなのための鑑賞サポートという考え方

木ノ下

では、僕からもちょっと悩み相談をさせてください。らう者の皆さん、あるいは聞こえづらい方にお芝居を見ていただきたいなと思って頑張ってSNSで発信しているのですが、その情報が届いているかどうか、なかなかわからなくて。ここに連絡するといよいよとか、チラシを置いておくといよいよとか、何かそういうことがあればお聞きしたいなと思います。

参加者

シアター・アクセシビリティ・ネットワークの公演情報サイトは、多くの人が使っています。また、2023年の秋に、西日暮里でろう者が集まる5005(ごーまるまるごー)という居場所ができますので、そこに

チラシを置いたり、情報を伝えたら良いと思います。ほかには聞こえない子たちが学んでいるろう学校の教職員などにチラシなどをお送りするのも良いと思います。東京都の教育委員会を通してろう学校に伝えれば良い効果があると思います。

それから、インターネット中心になりますが、ろうコミュニティに口コミで情報を伝えるのも良いかもしれません。ここにいる参加者の皆さんもお友達に「よかったよ」、「おすすめ」と発信するなど、口コミで広がっていくのが一番いいかなと思います。

木ノ下

なるほどなるほど。ありがとうございます！

最後に、僕が最近鑑賞サポートをするときに思うことがあるんです。それは、鑑賞サポートをすることで、聞こえない人が受け取れない部分を底上げして、聞こえる人と同じレベルにしたいなと思っています。本当にそうなのかなって。

たとえば字幕を耳が聞こえる人が見ても、文字で情報が入ってきてとてもよくわかるんですね。今回は全て現代語のお芝居でしたけど、木ノ下歌舞伎は作品によっては古典の言葉で上演することもあります。そのときにやっぱり文字があると、すごく理解が深まります。

あるいは、視覚障害の方に向けた音声ガイドも、ビジュアルの情報を音声としてお伝えするだけではなくて、作品の補足説明もしますから、それがあってによって、作品の理解が深まります。見えない方以外の方のためにもなる気がするのです。

なので、音声ガイドや字幕というのは、本当は障害

のある方もない方も楽しめるものだといいのだろうなって思います。鑑賞サポートを受けたほうが作品が深まって見えるような環境が作れたらと考えています。

いつになるかわかりませんが、舞台上に手話通訳さんがいる公演を、やってみたいですね。それはもう、手話通訳さんが舞台上にいることを前提として、作品を作る必要があります。演出の中に手話が組み込まれているわけですから。それを、字幕や手話が必要としないお客さんが見えても、手話って面白いとか、そうした興味にもなるといいなと思っています。

鑑賞サポートってというのは、公演の付随物じゃないってことですね。労力があるからやる、余裕があるからやる、余裕がなければやらないってことではない、何かがあったときに切り捨てていいものではないと思います。木ノ下歌舞伎ではそのときそのときの条件を考えながら、できるだけ副産物ではない、付属物ではない観劇サポートというのを今後も続けていきたいなと思いますので、ぜひ温かい目と厳しい目で見てもらえたらうれしいです。

勸進帳を深める会 【音声ガイド編】（見えない・見えづらいお客様対象）



実施日：2023年9月17日(日)公演終了後 / 会場：東京芸術劇場 シアターイースト

対話の中で練り上げて作る
音声ガイド

木ノ下

木ノ下裕一です。ジーンズを履いています。髪型は、男性にしては少し長めですが、前髪をカチューシャで止めておでこが出るようにしています。茶色の丸い眼鏡をかけています。そういう風貌の木ノ下でございます。よろしくお願いたします。

木ノ下歌舞伎では、観劇サポートの音声ガイドを実施するのは今回の公演で4回目になります。皆さんの耳元でガイドをしてくださっていたのが、持丸あいさんという、バリアフリーナレーターの方です。木ノ下歌舞伎では、持丸さんにいつもお願いしています。いまも、皆さんに向かって、左側の座席に座っていらっしゃいます。

この舞台も、持丸さんと一緒に、どんな表現がいい

かなというんなことを考えながらつくってきました。それが皆さんにどんなふうに届いたか知りたいと思っていたので、今回鑑賞サポート利用者の声を聞きたいという東京芸術劇場と想いが重なり、この会を設けられてとても嬉しく思っています。

-会場のみなさんに小道具の扇子を触っていただきながら-

いま、触っていただいている扇子は、侍とか、少し偉い人が持つ扇子です。閉じても少し膨らんだままの形ですね。本番で使っているのと同じものです。4人の俳優はこれを持っているときは義経の家来のように、山伏役、持っていない時には富樫側の家来というように、持ち物を持つか持たないかで役を切り替えていました。それでは、今日の公演を受けて、なんでもお声を聞かせていただけたらと思います。

頭の中に絵を描く時間を

参加者

今回、舞台が早く展開していて、どちらにどう動いているのかがわかりにくいところがあったかなと思いました。盛り上がれば盛り上がるほど音楽が大きくなってくると同時に、音声ガイドが聞き取りにくくなり、もったいないなど。事前にネタバレにはなるが、解説や説明があるとよかったですかなと思います。

木ノ下

音の問題ですね。僕も今日この席で、イヤホンをつけて音声ガイドを聞きながら見ていたのですが、たしかに音が大きいところは音声ガイドのボリュームのボタンを2つぐらい押してちょうど良いくらいでした。手探りで機器を触ってプラスボタンを押すという操作のハードルも高いと思います。

大きい音の時は、ナレーション全体の出力を上げるような調整はしているのですが、ちょっと今日は、音に負けちゃう感じがすごくしました。

展開が早くてガイドが追いついていないというのも、確かに言われてみればそうかもしれないというところがありました。僕はどうしても視覚的な情報がありつつ音声ガイドを聴いているのでついていけるんですよね。きっと頭の中に舞台の絵を思い浮かべる時は、もう少し時間がかかるというか、その想像する時間、頭の中に絵を描ける間のようなものが必要なんだなと思いました。今回の公演で、これから音声ガイドは東京でもう1回と地方巡回の2か所でも実施しますので、改善していけたらと思います。

触ることや役者本人の声を通じて
立体的に知る

参加者

視覚障害がある人の場合は、最初のイメージを作る段階で、俳優さんが着ている服装や、こういう動きがあるというようなことが掴めたいと思います。今回、音と踊りのイメージは作れたのですが、俳優一人ひとりの個性のイメージが作りづらかったかなと感じました。

木ノ下

冒頭に、役者の服装を「登山服のようです」とか「特殊部隊に近い衣装です」というような音声での説明はしたのですが、まず、開演前に実際に舞台上がってもらったり、舞台の模型に触れるような、言葉以外でも空間を立体的に掴める取り組みがあったらよかったですかなと思いました。衣装にも触れていただくことができればいいですね。やりたいことが、どんどん広がってきます。

参加者

芝居が好きで解説付きの舞台にはよく行っているのですが、今日のように歌舞伎系のは、現代語訳でも見たことがありませんでした。感想としては、今日の解説はとてもわかりやすく、お芝居を楽しむことができました。ありがとうございました。

木ノ下さんがおっしゃったように、私がよく行く劇団では、事前に小道具やドアや窓に触らせてもらう時間があるんです。俳優さんも「衣装を着ていますから

触ってください」って触らせてくれたりして。今日も持丸さんから衣装の解説がありましたので、想像はできたんですけど、たとえば義経さんが着ていた洋服ぐらいは、モデルか触れるサンプルがあれば、やはり嬉しかったかなと思います。

参加者

私もこれまで何度か音声ガイド付きのお芝居を見てきていいなと思ったのは、事前説明で役者さんが衣装を着て前に出てきてくださって、ご自身の衣装を説明してくださったことがありました。そうすると声の印象がつくので、役で出てきた瞬間に「あ、これは義経だな」と声で判断ができます。できたら公演が始まる前の音声ガイドのときに、俳優さんの声も聞かせていただけたらありがたいなと思いました。

木ノ下

そうですね。先にこの俳優さんはこういう声だとわかるだけで、ずっと作品に入っていける気もしますよね。今後の参考にさせていただきます。

座席によっても異なる舞台の見え方をどう伝えるか

木ノ下

音声ガイドは準備をしている段階でも本当に面白いんです。どういう風に説明するかによって、印象が変わってきますよね。たとえば今日のシーンで、富樫がみんなを通すか通さないか迷っているところがあっ

たのですが、「この関をお通りください」って言うところの弁慶の表情をどういう説明するか、すごく議論したんです。

なぜかという、この時の弁慶は、わりと無表情なんです。でも見ている人によって、色々な表情に見えるわけです。富樫の行動を意外に思っているようにも見えるし、冷静に見つめているようにも、義経を守っているようにも見える。お客様が舞台をどう見るかによって、弁慶の表情の見方も変わってくるシーンなんです。

なので、これを「無表情です」と言ってしまうのも違うとか、「鬼の形相はどうでしょうか」とか、でもそれだと怒っているふうになっちゃうよねとか、色々な意見を出し合って、最終的に「富樫を見据える」という言葉にしました。

1つの言葉の選び方によって、きっと皆さんの頭の中に想像される世界がだいぶ変わると思うんです。だからすごく責任重大だし、私たちが作った作品がよりクリアに皆さんの頭の中に届くように工夫するっていうのは、すごく楽しい作業だなと思いながらやっておりました。持丸さんは、いかがですか？

持丸あい

そうですね。この舞台、客席が対面になっていて、観劇する席によっても受けるイメージが変わると思います。みなさんがいまいらっしゃるお席は、義経の表情がよく見えて、彼らの信頼関係を感じやすいお席になっています。逆サイドは富樫がよく見えます。富樫がどうして関所を通したのかがよく分かるお席だと思います。

色々な捉え方で音声ガイドを作るのも楽しいと思うながらの、今日の音声ガイドでした。いまご感想をいただいて、伝わるが多かったようで、ほっとしています。

多様な「ボーダー」を体感する時間に

参加者

今回の作品テーマは「ボーダー」だとお話しされていました。舞台中にも、ボーダーに見立てて照明でラインを引いたという解説もありました。私たちにも見える人と見えない人がいて、観客にもボーダーがあると取ることもできたなと思いました。

木ノ下

歌舞伎の『勸進帳』自体がボーダーの話として読み解けるんですね。たとえば、義経が弁慶に手を差し出すんだけど、どんなに仲が良くても、主人と家来には超えたいボーダーがあるという風に見えるでしょうし、富樫と義経の敵味方のボーダーなど、色々なボーダーがあります。

いま私たちが生きている世界でも、いろんなボーダーがあると思うんですよね。そこにも発想がいくように作っていました。たとえば昨日はポータブル字幕での鑑賞サポートを実施して、聴覚障害のある方が見に来てくれました。終わった後の会話で、最後のシーンで弁慶や家来たちが楽しそうにたこ焼きを食べたりしているのを、少し離れたところから富樫が見ているシーンを見て、「みんなが楽しく話しているところに自分だけ入れない」とか「輪に入っはいるん

だけれども、みんなの喋っていることがわからない」という疎外感を、常日頃感じているというお話をいただきました。

舞台から、ご自身が抱えているボーダー、あるいは超えようとしているボーダー、そういうものがイメージされるお芝居になればいいなと思って、この作品を作っています。

音声ガイドで観劇するという新たな文化を作りたい

木ノ下

最後になりますが、木ノ下歌舞伎では、今後も鑑賞サポートの取り組みを続けていきたいと思っています。音声ガイドを聞きながら見ることによって、目の見える人とはまた違う面白がり方、楽しみ方がきつとあるんだと思うんです。そこを大事にしないといけないと思っています。

あわよくば、どんどん音声ガイドが普及してって、目の見えるお客さんからも「いいな、音声ガイドで見てみたいな」という感覚が出てくると嬉しいなと思うんですよね。目が見える、見えないに関わらず、音声ガイドと一緒に聞いて、その後感想を共有できるようにところまで行けたらすごくいいなと思っています。

まだまだ始めたばかりの試みですので、みなさまからのご意見を大事にしながら、より良いサポートになるように進めていきたいです。

字幕機利用者の意見交換会

木ノ下歌舞伎『勸進帳』東京公演を、字幕機を利用して鑑賞した方にお集まりいただき、当日の字幕に対するご感想を伺いました。窓口での対応や情報発信について、劇場へのご要望等もヒアリングし、鑑賞サポートをより良くしていくための意見交換の場となりました。当日の様子をレポートします。

意見交換会実施日：2023年9月22日（金） / 会場：東京芸術劇場 会議室

情報保障：手話通訳、字幕（UDトーク）

意見交換会の参加者（観劇経験／聞こえの状態・コミュニケーション方法／意見交換会への参加方法等）

Aさん

俳優として演劇に携わる／生まれつき右耳が聞こえない。学生時代に聴力が落ちて両耳を失聴したが、音を聞いた記憶は残っている／手話話者／対面参加

Bさん

鑑賞サポートの仕事に携わる／生まれつきのろう者。補聴器を両耳につけているが、音のあるなしがわかる程度／手話話者・口話をすることもある／対面参加

Cさん

字幕の鑑賞サポートは今回が初体験／中途失聴者。10年前に失聴し、右側に人工内耳を装着している／口話や要約筆記等。手話を学習中／対面参加

Dさん

観劇経験多数／難聴者。聴力は70dB（高度難聴）。補聴器を両耳につけており、静かなところであれば会話ができる／オンライン参加

Eさん

字幕での観劇経験多数／難聴者。補聴器を両耳につけており、音声の内容は4割ほど把握することができる／音や文字から情報を得ている／オンライン参加

司会進行：Palabra株式会社 代表取締役 山上庄子さん



進行の山上さんと、お話の内容を伝える手話通訳者さん

1) 木ノ下歌舞伎『勸進帳』東京公演字幕の感想

字幕について

- シンプルな字幕で見やすく、芝居に入り込める字幕表示の仕方だった
- 字幕の出るタイミング、間の取り方が良かった
- 音の調子や強弱をフォントの大きさや太さで表す工夫が興味深かった
- フォントの大小、太字などの字幕表示のルールを事前解説してもらえたら更によかった
- 音情報の字幕が多く付与されていたことが特徴的だった
- 舞台を見てわかるところは舞台に集中したいので、字幕をずっとは見えていなかったが、詳しく知りたい時や舞台を見てわからない時に字幕で補うことができ、楽しめた
- ラップの歌詞や、仏教用語等の専門用語は、聞こえる人からも字幕表記が欲しかったという声があった。舞台をより理解する助けになるものとして、将来は、舞台上のスクリーン等に字幕が表示されるようになれば嬉しい
- 冒頭のセリフが入り混じるシーンで、舞台上の演者と字幕に表示されている役名を把握するのが難しかった。事前に台本を共有する、字幕の中に顔写真も表示する、パンフレットの顔写真に役名も記載するなどの工夫があればなお良かった

Aさん

木ノ下歌舞伎が大好きなんです。もう何年も前から見ていて、『勸進帳』も今回が2回目です。前は台本を借りて、それを読み込んでから観劇に行きました。でもやっぱり覚えきれず、内容が完全には入ってこないんですね。

今回の字幕はシンプルで、文字だけがポンポン表示されると

いうものでした。それがとても見やすく、落ち着いて見ることができて、芝居に入り込める字幕表示の仕方だったと思います。お芝居の内容も全て理解することができました。

以前、木ノ下歌舞伎の別のお芝居を見に行った時には、文字が動いたり画像が出てきたりするアニメーション字幕でした。どちらにも良い面があるので、作品によって字幕の表現方法を選ぶという考え方がいいのかなと思います。

Bさん

木ノ下歌舞伎の鑑賞は、今回で3回目です。前は、Aさんと一緒にアニメーション字幕を見たのですが、その時は座席が舞台から遠くて役者の動きや表情まではっきりと見えませんでした。そこをアニメーション字幕が補ってくれた印象があります。舞台が盛り上がっている時にはアニメーションもそのような表現になって視覚的に伝わったり、多様な表現のおかげで集中力を保つことができ、字幕に救われたところがあったように思います。

今回は、字幕を出していただくタイミングが非常に良かったと思います。セリフが終わっても字幕が出たままということが起こりがちなのですが、そういったこともありませんでした。セリフが放たれた後に画面表示が真っ黒になり、一旦初期化されて、また次の字幕が台詞のタイミングに合わせて表示されるという間の取り方も、とても良かったです。

文字が太字になることもありましたね。音の調子や強弱をフォントで表してみようという工夫をしてくださったんだと、非常に興味深く見ることができました。

一方で、私は字幕を見る経験が豊富なので、「なるほど、声の強弱をこういう方法で表すんだなあ」と受け取りましたが、それに対して特段の説明はなかったと思います。字幕に慣れていない方だと、そうした意図に気づけない場合もあるかもしれません。事前に字幕の表示ルールを解説していただいたほうが、もっと理解が深まったのではないのでしょうか。



全体が見渡しやすい座席配置の会場の様子。オンライン参加方はモニターで表示。

今回の字幕で特徴的だなと思ったのは、音情報がたくさん付与されていたことです。ライターのを閉めるときの「カチャン」という音や、火をつけたときの「シュッ」という説明系の情報、そして「首がゴロゴロと転がっていく」というオノマトペのような表現もありました。首は、発泡スチロールのような軽い素材かなと想像していたので、「ゴロゴロ」という音でもっと重い素材なのだとわかって新鮮でした。

Cさん

私は皆さんと違って、観劇経験がほとんどありません。30年ほど前に1度見たことがあるくらいです。今回初めて木ノ下歌舞伎を見たのですが、第一に、舞台を見てわかる場所は舞台に集中したいという気持ちがありました。なので、字幕をずっとは見えていません。詳しく知りたいとか、なんだろう？という時に、字幕をちょっとだけ見る形でしたが、とても楽しめました。字幕を見て不満に感じることもありませんでした。

少し迷ったのが「鳥が飛び立つ音」という字幕が出た時です。自分は音が聞こえないので、どのぐらいの大きさの鳥が何羽くらい、どんな場所から飛び立ったのかはわかりません。それを足りない情報と捉えるか、または自分なりの想像で楽しめるという見方もあるかなと思いました。

Dさん

木ノ下歌舞伎を見るのは3回目です。今回は登場人物が少なく舞台の距離も近かったのですが、私も字幕はわからなかったところを補足する感じで見て、舞台上の演者の方に見入っていました。字幕がシンプルで、また効果音も含めて字幕に出してくれるからこそ、様々な舞台背景まで把握できたと思います。

Eさん

木ノ下歌舞伎が昔から気になっていたのですが、予定がなかなか合わなくて、今回初めて見ることができました。『勸進帳』という物語は知っていましたが、こんなに深い話だったんだという驚きと感動と共に鑑賞しました。

字幕と舞台、そしてヒアリング



意見交換会ではコミュニケーション支援アプリ「UDトーク」を使用。各参加者の前にタブレットを設置し、音声情報を文字で表示。

のですが、この三つがあるからこそ、舞台の内容を掴んで感動することができて、とても嬉しかったです。字幕は全体的にとてもわかりやすかったです。

聞こえる友人と一緒に見に行ったのですが、ラップの歌詞は、集中して聞かないとわからなかったようで、友人は字幕の歌詞が欲しかったと言っていました。弁慶が仏教用語をたくさん話すシーンもありましたよね。そういうときにも字幕があると、誰にとっても舞台をより理解する助けになるのではないのでしょうか。いずれ、舞台上のスクリーンなどに字幕が表示されてみんなで楽しめたら嬉しいな、と思いました。

ほかに気になったところは、上演前にスタッフの方が前に出てきて観客全員に何か注意事項をお話しされたのですが、そこは字幕には出てきませんでした。手話通訳の方もいなかったの、何を言っているのかわからず、字幕ユーザーが動揺してしまいました。周りの観客の方が説明してくださったんですけれども。

また、冒頭のシーンで登場人物のセリフが入り混じり、演者の誰が、字幕に表示されているどの役名なのかを把握するのに少し混乱しました。可能であれば、事前に台本を共有していただくなどの対応があれば良かったかなと思いました。

Bさん

字幕を見て舞台も見るという忙しい状況の中で、複数の話者の話が重なり、なおかつそこに役名が出るとなると、演者の判別に時間がかかると思います。以前、字幕の中に顔写真も表示されていることがあって、わかりやすかったです。当日配布するパンフレットでもいいので、顔写真のところに役名を並べて載せてくださると、若干ですがわかりやすくなるのではないかなと思います。

2) ポータブル字幕機の提供方法

アームスタンドについて

Eさん

今回、字幕機の大きさはスマホサイズでしたが、文字を大きめに表示してくださっていたので、読みにくさはあまりなかったです。良かったのはやはりアームスタンドです。これがあることで、程よい高さで見るこ



アームスタンド

ができて素晴らしいと思いました。

Dさん

アームスタンドは、自分の見やすい位置に調節ができてすごく良かったです。ただ、取りつけている時に触ってはいけないところを触ってしまったりして、担当者の方に調整していただきました。私には取り付けが少し難しかったです。

受付対応について

Aさん

劇場に入る時に、障害者割引の確認のためだと思いますが、本人確認が必要でした。チケットをもぎってロビーに入った後、字幕を借りる時にもまた障害者手帳を見せてくださいと言われたんですね。本人確認が必要ということはわかるのですが、事前情報として、確認のタイミングなどを伝えてほしかったなと思いました。

Bさん

当日、時間ギリギリに会場に駆け込んだのですが、チケットに割引と書いてあったためか、音声で何かお話しされたんですね。内容が分からず、その様子を見て手話通訳さんが慌てて駆けつけて説明してくれました。チケットをもぎるところに手話通訳が立っていたらもう少しスムーズにいったのではと思いました。

一般のお客様への鑑賞サポートの周知について

Cさん

聞こえる人は、今回の鑑賞サポートのことを知っているのかなと思いました。場内が暗くなる上演中に、少しでも明かりが出ると気になりますよね。スマホやスマートウォッチが光ると、マナー違反だと迷惑に感じる人は多いと思います。

今回はスマホと似た形の字幕機だったので、遮光フィルムを貼ってもらっているにしても、周りの人が字幕を見ていることを知らない、非常識だと思われるんじゃないかと。鑑賞サポートの理解が、利用する人だけではなく会場にいるみんなに広がっていくことが大事ではないかと思いました。

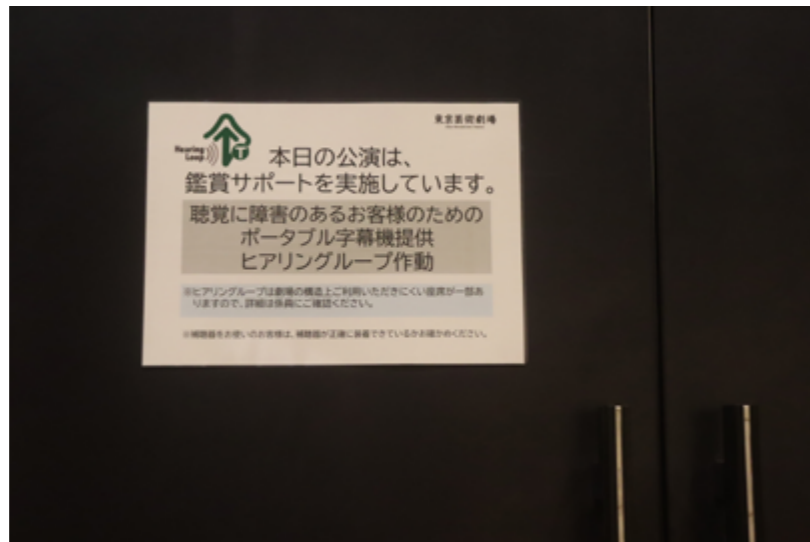
Bさん

今回、ロビーのドアのところに鑑賞サポートのお知らせが貼られていましたよね。でも、一般のお

お客様がそれを見て、把握していたかどうかはわかりません。たとえば全体アナウンスで「今日は鑑賞サポートで聞こえないお客様に字幕を用意しています。観劇中にタブレットを使いますのでご了承ください」というのがあってもいいのかなと思いました。

他の劇場で、すごく大きなポスターで出入口にお知らせを掲示しているところもあります。

間違いなく目に入るのですが、あれくらい目立たせてもいいのかもしれない。



会場に掲載された鑑賞サポートのお知らせ

情報発信について

Dさん

鑑賞サポート付きの演劇公演を探していた時に、シアター・アクセシビリティ・ネットワークの掲示板から今回の公演情報を知って予約しました。私は名古屋に住んでいるので、この掲示板がないとなかなか情報が回ってこない状況です。もっと周知が広がったらいいと思います。

Bさん

劇場のPR方法でも工夫できるのではないかなと思います。たとえば木ノ下歌舞伎について、公演の見どころなどをメディア配信する時に、「字幕付きの公演もあります」とお知らせする方法もあると思います。木ノ下さんも、ご自身のSNSで「字幕を作りました」と発信されていました。鑑賞サポートの存在を、もっと幅広く発信できたらいいですね。

鑑賞サポートの機会や在り方について

Eさん

今回、私が申し込んだときには字幕席が残り1席でした。周知から間もないタイミングに申し込んだと思ったのですが、字幕席って少ないんだなと思いました。東京芸術劇場さんの他の公演でも、たまに字幕席が取れないことがあります。もっと座席数や字幕対応の日が増えたら嬉しいです。

Bさん

字幕付きの公演やコンテンツが増えてきて大変嬉しいのですが、でもやはり聴者の方と比べると鑑賞の機会が圧倒的に少ないと思います。ある公演では、1公演60ステージある中で、字幕が提供される日がたった2ステージでした。聞こえる人は60回見る機会があるのに、私たちろう・難聴者の場合は2回。大きな格差があると思います。申し込んでも抽選に落ちることが多々あり、非常に残念な状況です。

ある劇団では、いつでも字幕を提供しています。チケットを先に取ってから、字幕を申し込む方法なんです。最近はトークショー付きの企画も増えていますが、そういう日には、手話通訳と字幕、またはその両方が必要か不要かを入力する欄があります。聞こえない人の参画の機会がもっと増えるために、本当はそうあってほしいなという気持ちがあります。

Aさん

字幕は、演出の方、劇場の方、字幕を制作し貸し出す方など、本当にたくさんの人の努力と支援があって成り立っていると思います。そんな方々のことにも思いを馳せ、ありがたいなという思いで今回字幕を見ていました。逆に言うと、簡単にできるものではないということですよ。でも、それを広めてほしいなと思うので、やはり広く理解していただいて推進していただけたらと思いました。

Eさん

東京芸術劇場さんでここ何年か舞台を鑑賞していますが、字幕付きの公演が増えて、全国でも一番字幕が付く機会の多い劇場と言えるのではないのでしょうか。どれも記憶に残るいい作品ばかりで、私は月に二回くらい芸劇さんに通っています。

他の劇場ですと、一度字幕がついたから見に行っても、ポスターを見て次はこれが楽しそうと思っても、そこに字幕がないのですよね。なので、すごく寂しい思いをして帰ることがあります。芸劇さんは毎月、何かしら字幕のつく作品を提供してくださっていて、劇場の皆さんが率先して取り組んでくださる努力のおかげだと思います。本当に嬉しく思っています。

鑑賞サポート実施劇場 担当者座談会

今回木ノ下歌舞伎『勸進帳』の公演で鑑賞サポートを実施した巡回先劇場の担当者と、それぞれの気づきや課題を共有する座談会を実施しました。今後の持続的な鑑賞サポートの自走に向けた対話の時間にもなりました。



実施日：2023年12月6日(水) / 実施方法：オンライン

座談会参加者(敬称略)

那覇文化芸術劇場なは一と：土屋、長嶺 ※以降「なは一と」と表記

サントミュージゼ(上田市交流文化芸術センター)：横尾 ※以降「サントミュージゼ」と表記

岡山芸術創造劇場：宮嶋、森山

山口情報芸術センター：土居、阿武

水戸芸術館：櫻井

京都芸術劇場 春秋座：芝田 ※以降「春秋座」と表記

東京芸術劇場：多田、三谷、佐藤、黒木 / 進行：平原

鑑賞サポート実施後の感想

-字幕機提供と音声ガイドの鑑賞サポートを実施した感想をお聞かせください。

土屋(なは一と)

初めて字幕の鑑賞サポートを実施して、利用された方から「今までこんなに演劇を楽しめたことがなかったけれど、今回はすべてを理解できて本当によかった」というご感想をいただいたことが、私にとっても感動的でした。

これまで障害者割引を用意はしていたのですが、なかなか満足にサポートを提供することができず、控えめに表記していました。こうしたサポートがあると、皆さまに楽しんでいただけたことがわかったので、これからは堂々と表記して、割引もご利用いただいて、劇場に足を運んでもらいたいなと思いました。今後自分が企画する作品でも、字幕のサポートをやってみようと思えた良いきっかけになりました。

長嶺(なは一と)

字幕サポートに初めて取り組んで、実際に利用される方がどのくらいいるのかわからず不安もあったのですが、当日たくさんの方がいらして、アンケートを見ても皆さん「良かった」というご感想だったので、取組の可能性を感じました。なは一ととしても、この後どんな形で広げていけるのかを考える大きな一歩になったと感じています。

横尾(サントミュージゼ)

サントミュージゼでは、字幕サポートを実施しました。私の兄が視覚に障がいがあることもあり、私は上田市の障がい者団体の家族会に参加しています。障がいがある人の家族という視点もあり、皆さまとは取組への思いが少し違うところがあったと思います。鑑賞サポート実施後、視覚・聴覚に障がいのある方、車いすを利用する方等のご家族とお話をする機会があり、皆さん今回の取組について「とてもよかった」とおっしゃっていました。サントミュージゼは上田市直営の劇場なので、上田市と連携しながら今後どう展開していったらいいのか考えていきたいです。

芝田(春秋座)

春秋座では、字幕機提供と音声ガイドの両方の鑑賞サポートを実施しました。ご参加いただく人数は多くはなかったのですが、劇場において障害のある方に対するサポートが十分でなく「これまでなかなか観に来れなかった」との声をいただく等、いずれの回も皆さんとても喜んでくださいました。

土居(山口情報芸術センター)

字幕機の提供と音声ガイドを実施しました。視覚、聴覚、どちらの障害がある方にも喜んでいただけたサポートになったと思います。一方で、特に視覚障害がある方の集客が難しく、実施数日前にご参加者が見つかった状況もありました。皆さんどのようにお声がけをされたのかも、ここでお聞きできたらと思っています。

阿武(山口情報芸術センター)

普段から劇場に対するハードルが高いと感じている方々が、今回の鑑賞サポートをきっかけに初めてお越しくださいました。『勸進帳』の舞台だけではなく、劇場自体がどのような取組をしているかにも広く興味を持っていただけたのかなと思います。いろんな人がリアルで集まって、同じ観劇体験ができたことに感動していらっやっったのも印象的でした。

森山(岡山芸術創造劇場)

私たちは今年9月にオープンした新しい劇場で、字幕機の提供も初めてでした。お客様からは「初めて見た、こうした機会が今までなかった」というご感想や、「新しい劇場でこのような取組をしてくれるのはすごく嬉しい」、「他にもこういう作品を見たい」という声をいただきました。また他の事業でもできたらいいなと思いますし、今後どのようにアプローチしていけばいいのか考えながら、輪を広げていけたらと思っています。

宮嶋(岡山芸術創造劇場)

今回の鑑賞サポートの実施は、我々事業グループだけでなく、舞台技術や総務のスタッフにとっても初のチャレンジでした。時代的にも、これから取り組むべき課題となっていると感じます。実施直前になって「このケースはどうしたらいいんだろう」など、色々な疑問点も見えてきて、興味を持つ職員も増えたように思います。

告知の方法も、自分たちでお客様を開拓するために、岡山県難聴者協会やろう学校なども訪問することができて、劇場のアピールにもなりました。「観劇

したい」という気持ちは誰でも持っているのだと、当事者の方の声を直接聞いて実感できたことも大きかったです。これからも取組の中で色々な可能性を見つけていきたいです。

櫻井(水戸芸術館)

字幕機の鑑賞サポートを実施しました。水戸芸術館は開館34年目なのですが、今回体験されたのは、開館してからここでいろんな作品を見てきた方でした。ご自身に聞こえづらい、見えにくいという症状が出てきて、それでも観劇したいというご希望をお持ちでした。長い取組の中で、そうしたニーズが生まれてきているんだなと感じています。

オープン当時は、まだバリアフリーを意識していなかった時代です。様々なバリアに関しても、改修ですべてクリアできるのか、あるいはサービスや人力を持ってある程度解決していけるかという議論もあります。

今回は特に、劇場同士がネットワークを組むような形で、東京芸術劇場にみんなで行って現場を見たり情報交換ができたことも、大きな成果なのではないでしょうか。今後新たな展開をする時も、皆さんと連携できたらいいなと思いました。

実体験から醸成された「次へ」の意識

-鑑賞サポート実施後、各劇場担当者の皆さまにアンケートにご回答いただきました。「気づき」の面では、現場からの学びが大きかったというご感想が多くありました。

芝田(春秋座)

これまで視覚障害のある方と接することがなかったので、今回の鑑賞サポートが初めての対応となりました。直前に自分でもご案内の方法を調べたりしたのですが、当日いらした方で自身が、声かけや案内の方法を教えてください、こちらと息を合わせるように動いてくださったんです。お席やお手洗いへのご案内もすることができました。どこに何があるのかといった状況をきちんと説明することも大切なのだと知りました。

宮嶋(岡山芸術創造劇場)

公演が近づいて一つひとつを落とし込んでいった時に、どういう方が来るのか、また、告知から申込み、受付、来場からお帰りまで、どんなパターンが考えられるのかを検討しました。担当には事前に情報があっても、技術や他のスタッフにまではなかなか伝わらない部分があり、そこが不安につながるということもありました。

劇場としてのサポート体制や、どういうコミュニケーションやご案内であればお客様に伝わるのか、職員全員が共有できる情報になっていることが大切だと思います。

一方、事前に把握していた部分も、当日はバタバタの中で対応してしまった部分もあって、字幕機のサポートをただけでは鑑賞サポートというのは完結しないんだと知りました。

-山口情報芸術センターは、今回の経験を通じて、障害を持つ利用者を受け入れていくための職員研修

を実施予定と答えてくださいました。

土居(山口情報芸術センター)

初めての試みだったので、障害を持たれた方を当日どういうふうに入れたいか、不安がありました。今回鑑賞サポートを実施したからこそ、「受け入れ体制を強化していきたい」、「研修もしよう」と、職員の中でより一層、社会包摂的な意識が高まったと思います。特に目が見えない方や耳が聞こえない方を意識した緊急時の対応や避難訓練はできていなかったのも、今後進めていきたいなと思います。

阿武(山口情報芸術センター)

どこまで対応したら失礼ではないのか、当事者の方が何を求められているのかといったことも含めて、研修などを通じて見つけていきたいです。

土屋(なは一と)

個人的に手話を勉強していることもあり、次年度に幅広い障害がある方々に向けた音楽の企画を考えています。劇場としての研修や人材育成となるとハードルがとても高いのですが、まずは企画のレベルで進めているところです。

県内で多様なお客様に向けたイベントの企画をされている方にお話を伺ったり、手話でお芝居している劇団に宣伝のご協力をいただいたりしました。皆さんの地域でもそうした活動をされている方がいらっやっるのではないかなと思うので、そことつながっていくのも一つのアイデアなのかなと思います。

鑑賞サポートが紡ぎ出す 新たなコミュニティ

横尾(サントミュージゼ)

鑑賞サポートの体験をしてくださった聴覚障がいのある方が、公演が終わってから、劇場に遊びに来てくれました。劇場にこれまでは来づかったけど、鑑賞サポートを通じて、気軽に来られるようになったというのが、自分の中でも驚きでした。

公演を鑑賞していただくという点ばかり考えていたのですが、鑑賞サポートをきっかけとして、障がいのある方が社会にもう一步踏み込める、そういうことができるすごい力があるんだと感じています。

-劇場が、新しいコミュニティを育む場になっているんですね。他の皆さんも、鑑賞サポートを実施した後に変化を感じたことはありますか？

櫻井(水戸芸術館)

横尾さんのおっしゃったことは、劇場として座席を埋めて券売につなげていくことはまた違うベクトルで出てきたものだと思うんです。こうしたサービスがあるだけで、なにか新しいコミュニティが生まれることを、僕も現場でなんとなく実感していました。字幕機を持って劇場に入って、職員も何人か体験していたのですが、それを見ているだけで「なんだろう」ってみなさん思うようで、そこから「実はこういうサービスがありまして、今回この作品を通じて全国で展開しているんです」というコミュニケーションができたりするんですよ。

今回は東京芸術劇場から、『勸進帳』という作品の巡回に鑑賞サポートを乗せて全国の劇場で体験してもらおうというコンセプトがあったので実現したのですが、次はどうやって継続していくかが大切だと思います。ここでやったことをひとつの事例として、うまくアピールしていくことができると、もっと僕らも色々手が打てるようになるのかなと思いました。

芝田(春秋座)

広報の段階で、当事者団体にお声がけをしたのですが、まず、こうした鑑賞サポートの取組が劇場でなされていて、そのサービスを受けられるということをご存知ない方が多いのを知りました。劇場が変わろうとしている、新しいサービスを提供しようとしていることを皆さんすごくポジティブに捉えてくださって、情報をたくさんいただけたんですね。待ってらっしゃったサービスだったんだとすごく思いました。ただ、それがわかってもらえず簡単にできることではないので、どのように続けていけるのかなという点を、私も課題に感じています。

土居(山口情報芸術センター)

鑑賞サポートの体験者の方々が、終演後にずっと感想を語ってくださったんです。私たちとしても、やってよかったなという思いと共に、一過性に終わらず継続していかないといけないなと実感しているところです。

アフタートークのときに、手話通訳と要約筆記の方にも来ていただいたのですが、スタッフ間でも「これからトークイベントに毎回要約筆記を入れられたら

いいよね」という話がでて、意識が高まっています。聴覚障害のある方だけではなくて、年齢を重ねてだんだん耳が聞こえにくくなる方もいらっしゃるので、そういった意味でもやっていけたらと思います。

継続の鍵を握る「連携」という在り方

-アンケートでは、人的・予算的な負担という課題について、「地方公共ホールは1公演に関わるスタッフがそう多くない中で、体制が整わず現場での作業が増えた」、「公演当日の対応が想像より人員を必要とした」という声もありました。今回、大変だったなど思った方は、挙手をしていただけますか？

(春秋座の芝田さん、水戸芸術館の櫻井さん以外の方が挙手)

-春秋座、水戸芸術館のおふたりに、そこまで大変でなかったと思う理由やコツがあれば、お聞かせいただきたいと思います。

芝田(春秋座)

何もすることがなかったという訳ではないのですが、今回残念ながら、ご利用なさる方が多くなかったので、たくさんの方にご連絡を取るか、事前に大規模に準備をするという大変さはなかったです。ただ、初めての試みだったので、アクセス面で、劇場に問題なく来てくれるかなという個人的なドキドキはありました。

櫻井(水戸芸術館)

組織がどのように作られているかもあると思います。水戸芸術館の場合は、各部門の役割分担ができていて、担当者だけで抱え込んでしまうことがないというのがあったかもしれません。

申し込みの方法については、なは一とさんを参考にさせていただきました。一館の自家発電に近い状態でやるよりも、各館のやり方や情報を共有できると、余分な負担が少しずつ減ってもっと進めやすくなると思います。

土屋(なは一と)

なは一とが巡回公演のトップバッターでしたし、舞台上に客席を設けるのも初めてだったので、未確定なことがある中で進めていく難しさはありました。私たちの場合、たとえばヒアリングループを設置するとき聴覚障害がある方々のご意見も伺いました。地域の当事者のみなさんを巻き込むと、そこから発信していただくことにつながりました。沖縄は障害がある方々も活動的で、劇場に対しても要望を伝えてくださる方が多いので、そうした地域性もあるのかなと思います。

阿武(山口情報芸術センター)

当事者団体の方に声をかけたのですが、お互いに直接顔を合わせた経験がなかったこともあり、劇場に足を運ぶことに不安を感じられたり、「自分が行っていいのかしら」といった声も伺いました。そういう意味でもやはり一過性ではなく関係性を構築したうえでお声がけすると、違った結果になるのかなと思います。

異なる組織がつながって 鑑賞サポートを実現するために

-運営上の情報共有の仕方について、「色々な連絡が各セクションから個別にあり整理に苦慮した」という声もありました。これについては、鑑賞サポートをコーディネートした東京芸術劇場の視点も聞けたらと思います。

多田(東京芸術劇場)

東京芸術劇場では演劇公演の鑑賞サポートを、年間を通して実施していますが、自分たちの鑑賞サポートを他の劇場に持っていく取組は、今回が初めてでした。

私たちの劇場では、公演を制作する段階では鑑賞サポートをつけることが決まっておらず、公演本体の制作が決まったあとで、別途、制作担当者に相談して実施を決めています。本来であれば、鑑賞サポート込みで制作が始まり、他の劇場が公演を買い取る際に鑑賞サポートの有無を選択できるのが理想だと思います。でも、現状私たちの劇場ではそのようなやり方ができていないので、今回も一旦決まった舞台図面やスケジュールに、後から入れ込んだり再調整が出てきたのではないかと思います。

今回、各劇場にはイヤホンガイドと直接連絡をとっていただきました。鑑賞サポートを実施する時に必要な流れを体験していただけたと思っています。

皆さまからのご意見をいただいて、今回のように他の劇場に鑑賞サポートを提供するだけでなく、共

同で鑑賞サポートを制作したり、様々な劇場が独自で鑑賞サポートを制作する時に、中間支援のような在り方でサポートしたりできる体制も整えられるよう検討していけたらいいなと思いました。

お客様への情報の届け方

-アンケートには、鑑賞サポートの広報の方法に悩んだという声も多く寄せられました。こんな発信や情報収集ができたという視点がありましたらお聞かせください。

宮嶋(岡山芸術創造劇場)

難聴者協会に相談すると、劇場公演はこれまであまりない事例だったそうで、広報誌で告知してくれました。僕たちがアプローチしたのは公演の2ヶ月ほど前だったのですが、「もう少し早めにわかっていたらもっと色々な告知の方法がありますよ」ともおっしゃっていました。次に届けたい情報がある時には、そうやってお願いできるんだなと勉強になりました。

芝田(春秋座)

聴覚障害の方はSNSを使っている方が多いと、多田さんからもアドバイスをいただいていたのですが、一方で、視覚障害のある方へのアプローチが難しいなと思っていました。当日の公演終了後、音声ガイドの鑑賞サポートを利用された方にも広報の悩みについてお話したのですが、後からメールで「こういうところに情報を送ったらいいですよ」と広報先情報をまとめて送っていただきました。

土屋(なは一と)

情報発信については、字幕機を新聞記者さんにも体験してもらって、取組やその感想も記事にしていたできました。

また、広報の表現として、字幕サポートがどのようなものなのか、言葉だけではなく見た目でもわかったほうがいいかなと思い、字幕機の写真をSNSに掲載したりしました。

持続的な鑑賞サポートの 自走に向けて

-最後に皆さまから一言ずつ、今後に向けての展望をお聞かせください。

横尾(サントミュージゼ)

今回とても良い取組ができたので、劇場としてはやはり続けていきたいと思います。持続的な鑑賞サポートという点では、サントミュージゼの場合、上田市の職員が大半で、大体3年で異動になってしまうので、なので、劇場単独で継続的に鑑賞サポートができていくのかというと、私の中ではちょっと難しいだろうという感覚があります。

今回の取組も含めて、上田市としてどう考えるのかを、市の福祉課や障がい者支援課にも打診しているところです。障がいのある方のサポートについては、市の施策としても重要な位置を占めていますし、だからこそ慎重にならざるを得ない部分もあるのですが、市が動けば継続できるというのが、私の考える今の劇場の立場です。

それとやっぱり『勸進帳』の演目が素晴らしかったですよね。どの作品に対応させていくのかという見極めのような部分も、今後の課題なのかなと考えています。

芝田(春秋座)

この取組に関わらせていただけて本当によかったなと思っています。実際にサポートを利用する方がいらっしゃることで、実施する時の体制や、そもそもの施設の問題として「この通りはちょっと危ないな」とか「わかりにくいな」といったことも見えてきました。そういう感覚って忘れてしまいがちなので、大きな形での鑑賞サポートの継続がすぐには難しくても、何か小さい、できるところで継続していけたらなと思っています。

一つの劇場だけでやるのではなく、すでに進められている東京芸術劇場や、他の劇場の知見の集まりが本当に心強くて、それがなかったらなかなか難しかったと思うんです。こういう形で複数の劇場が協力しながらできたことがよかったです。

土居(山口情報芸術センター)

鑑賞サポートを実施できたことは、とても大きく、良いきっかけをいただきました。人的・予算的な問題もあるので、すべての事業に関してサポートをつけられないかもしれませんが、1年に1回でもいいから公演事業のなかに取り込んで、継続していきたいなと思っています。

劇場の取組として鑑賞サポートをやっていることをアピールできるようにすると同時に、内部での共

有や、意識の面でも皆が同じ思いを持つことが重要であると感じているので、そのためにはどうしたらいいのか、ほかの劇場の取組も参考にしながら考えていきたいと思います。

阿武(山口情報芸術センター)

まずは今回鑑賞サポートに参加させていただけたのがありがたかったです。今まで社会福祉協議会や当事者団体や障害福祉課に、こちらからコミュニケーションを取っていったことがなかったので、この機会に新しいネットワークを広げることができました。今後の取組をしていく上でも関係性を途絶えさせずに継続していけたらいいなと思います。

理想としては、先ほど横尾さんが「公演後にも鑑賞サポートのご利用者が遊びにきてくれた」とおっしゃいましたが、私たちの劇場にも鑑賞の時だけではなくコミュニティの場所として気軽に来ていただいて「今日も来たよ」って言ってもらえるといいなと思います。

宮嶋(岡山芸術創造劇場)

皆さんから貴重なお話をお聞きできて、学ぶことが多かったです。今回の事業を通して劇場職員にもいろんな意味で良い刺激になったのかなと思っています。

継続については、劇場全体、それから岡山市全体でどう捉えるかということにもなってしまうのですが、まず一個人としてどう思うかというきっかけをいただいたように感じています。各個人が鑑賞サポートというものに興味を持って、自分たちから自発的に

いろんな学びをしていくことなのかなと。その気持ちで持続を可能にしていくのか、全体としてしっかり推進するのか、継続の方法はこれから考えていくことではありますが、今回連携をして各館それぞれが取り組んでいるんだというトレンドや空気感も内部で共有して、興味が広がっていくようにつなげていけたらいいなと思っています。

森山(岡山芸術創造劇場)

今日のこの座談会のような、いろんな館の取組や、実際にやってみてどうだったという話を聞いて、こうした連携を取ることでできる鑑賞サポートをこれからもやっていきたいと思いました。

今回の取組を通じて、岡山の難聴者協会の方や要約筆記クラブの方とのつながりも生まれて、自分たちの館と、地域の中での関わりからできるサポートもあるのかなと感じています。

今年、劇場がオープンする前の内覧会では、視覚障害がある方も見学にいらっやいました。やっぱり新しい劇場への関心が高いと思いますので、今のうちから「鑑賞サポートの取組もやっています」と浸透させていき、認知を広め、継続的に取り組んでいきたいなと思います。

櫻井(水戸芸術館)

今日この機会に情報交換ができて、皆さんのやり方を率直な言葉で聞かせていただいて、すごく助けになると感じました。

個人的な意見ですが、一劇場のみで鑑賞サポートをするというのは、なかなか大変だと思うんですね。

今回『勸進帳』という素晴らしい作品のソフトの力があって、それを通して「こういう鑑賞サポートもあります」と実施されたように、ソフトの力を使って多様な人を劇場に呼び込むことができるんだと伝わっていくと、もう少しいろんなことがやりやすくなるのかなと思いました。勉強になりました。

長嶺(なは一と)

なは一ともまだ手探りな部分がたくさんあります。今回こういった形で皆さんのいろんなご意見や、どのようにされているのかも伺いできて、とても貴重な経験だったなと思います。

なは一とも那覇市の直営でやっているのですが、福祉の部門などとも横断的に取り組むことができれば、那覇市としてももう少し大きな動きができやすいかもしれないと感じたところです。今後も取り組めたらと思います。

土屋(なは一と)

今回鑑賞サポートに取り組ませていただいて本当にありがたい機会だったと思っています。これまで、障害のある方々がどういうふうに通劇を楽しめるのか、ちゃんと考えていなかったのですが、今回の実践があって、皆さんのご感想や笑顔、お話になる姿を見て、純粋に「またなは一とに足を運んでほしいな」と感じました。

予算や人的なこともあります、自分も拙い手話で挨拶や名前を伝えただけで、本当にそれだけでも喜んでいただいて、「私たちはあなたたちに興味を持って、伝えたいことがあるし、また来てほしい」とい

う思いが伝わるだけでも「こういうふうにしたらいよ」とご意見をいただいて、一緒に考えてくださる方々でした。皆さんの力を借りて、色々な方々に来てもらえる劇場にしたいと、この機会を通して思いました。

-東京芸術劇場の皆さんからも、一言いただきたいと思っています。

多田(東京芸術劇場)

今回みなさまに実施していただいて、想像していた以上に難しかったと感じた方もいるかもしれませんが、でも当館も、この社会共生担当というチームができる前は、皆さまと同じような状況で、皆さまのサポートができる体制が整うまでに10年以上かかっている、長期的に考えてじっくりと体制を整えていただけたらと思います。

近年は鑑賞サポートについてご相談いただくことが増えましたが、今の時代の流れとしてやらなくてはならないと捉えられている方も多いいのかなと感じています。私自身も鑑賞サポートを担当した当初は、障害を持っている方のために、一緒に鑑賞を楽しんでもらうためにはどうしたらいいかと考えていました。鑑賞サポートをご利用いただく当事者の方やご家族の方、介助に来てくださる方とお話をするようになって数年経ち、私たち自身もこれから歳を重ねて耳が聞こえにくくなったり、目が見えにくくなったりしていくことがあるので、障害を持つ方のためだけでなく、誰もが長く鑑賞を楽しんでいくためにも必要なものだなという考え方に、変わってきてい

ます。

今回実際に当事者の方と触れ合っ得たことや新しいつながりが生まれたと思うので、今後も継続して広がっていき、誰もが来やすい劇場になっていくように考えていただけたらと思います。

三谷(東京芸術劇場)

貴重なお話を伺えて、とてもいい時間でした。なんだかすごく羨ましいな、と思うお話もあって。東京芸術劇場では、鑑賞サポートに来てくださった人が、作品の鑑賞以外でふらっと劇場を訪れるというのはなかなかないですね。やっぱりそれは地域性もあると思うんですけど、鑑賞サポートを通して地域が変わっていきけるような力を劇場って持っているんだというお話を皆さんから聞いて、羨ましいし、理想だなんて思いました。

今回いろんな人たちと連携をして鑑賞サポートを行ったと思いますが、連携した人たちと、引き続き一緒に進めていただければ、地域の皆さんが我々の劇場だっていうふうになってくれて、本当の意味での劇場になっていくんじゃないかなって思います。

佐藤(東京芸術劇場)

外部の方やご利用者の方との連携に加えて、内部や自治体の行政の皆さんと連携して一緒にやっていくということがすごく大事だと思います。

鑑賞サポートの担当チームができると、他の職員にとっては「彼らの仕事」になってしまいかねません。それを防ぐためにも、総務や舞台制作のスタッフ、あるいは広報や集客のスタッフなど、館内のお仲間た

ちにそれぞれ自分ごととさせていただいて、タッグを組んでやっていけるようになると、本当に劇場全体としてお客様を迎える体制ができて素晴らしいと思います。

黒木(東京芸術劇場)

トレンドとして広がっていくことや、劇場を越えてつながっていくことの大事さを改めて今日学ばせてもらいました。

いま我々の最善策だと思っているやり方が全てではなくて、もっと良い方法や、全く別のやり方もあると思います。これから継続されていく中で色々なやり方が出てくるかなと、今日のお話を伺って感じたので、そうした事例も共有させていただいて、色々な形で連携していけたらと思います。

アンケート集計結果

東京芸術劇場 木ノ下歌舞伎『勸進帳』

字幕機提供／音声ガイド

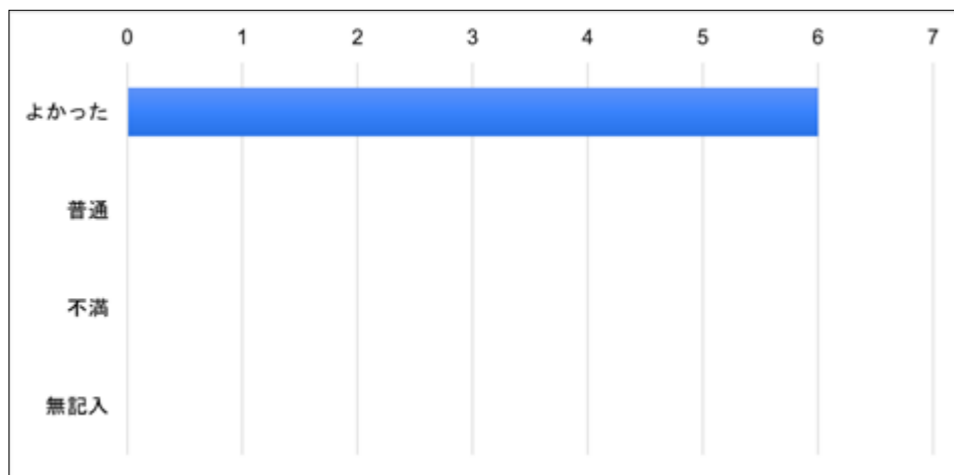
巡回公演 木ノ下歌舞伎『勸進帳』

字幕機提供／音声ガイド

アンケート集計結果

東京芸術劇場 木ノ下歌舞伎『勸進帳』 字幕機提供

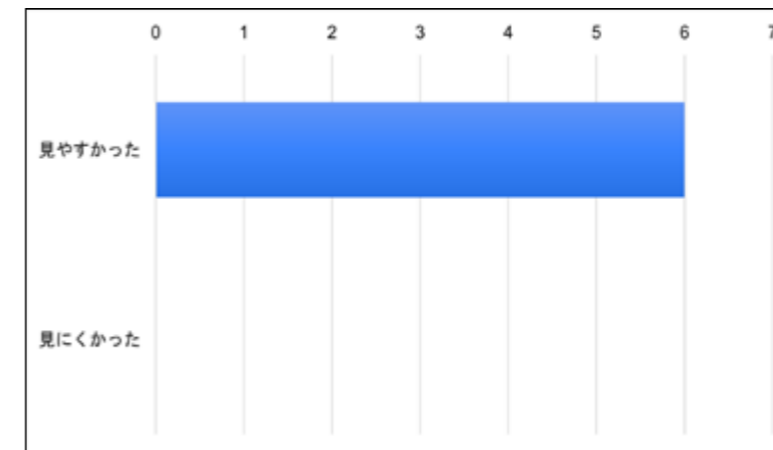
ポータブル字幕表示機を活用して演劇を楽しむという、今回の企画の感想をお聞かせ下さい



●回答の理由

- 読みやすかった
- 日常的に聞こえにくいという事は声を聞き取ることによりかなりの集中力を使うため、声を聞き取ること必死でせいかくのお芝居が楽しめなくなってしまうが、字幕サポートをして頂くことでお芝居そのものを楽しむことが出来て嬉しかった
- 聴覚障害になってから遠ざかっていた演劇が、また楽しめるようになったことに感謝
- 聴者であっても固有名詞は聞き取りにくいときがあり、古語は文字表記だと理解しやすかった

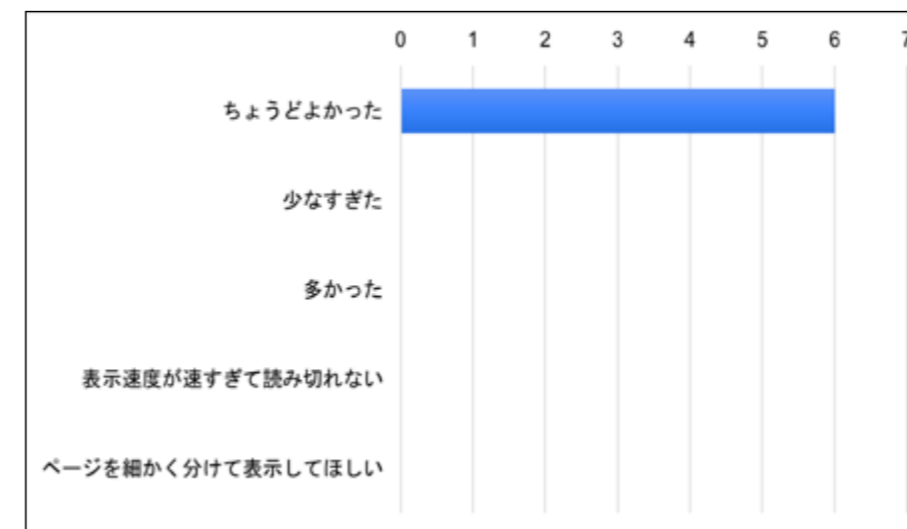
字幕の文字は見やすかったですか？



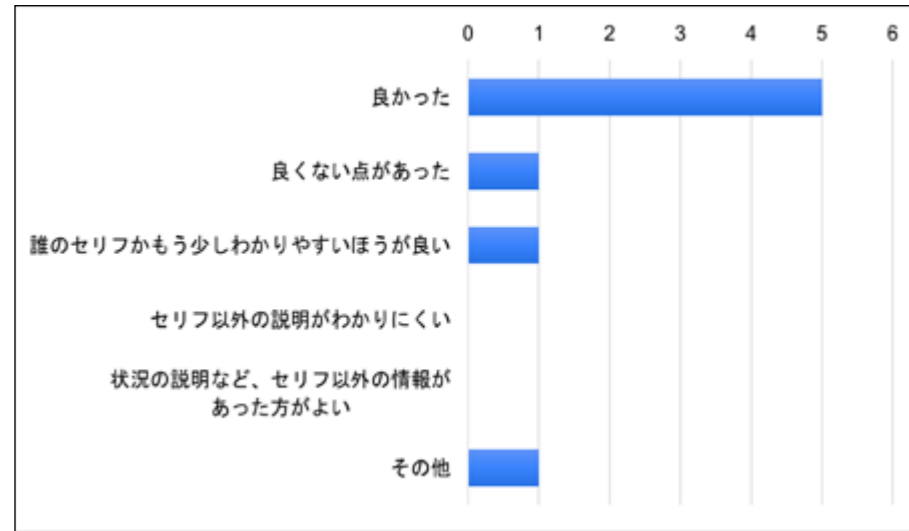
●回答の理由

- ゴシックのほうが、明朝体よりも見やすいと今回初めて思った
- 文字が大きめなので、舞台を見ながら読むことができた(文字が小さいと、文字だけを見てしまいがちなので、大きいフォントで良かった)
- 固定ではなく、アームで見やすい位置に置いて良かった
- セリフの強弱が文字の太さで表されていたり、とてもわかりやすかった

字幕の文字数



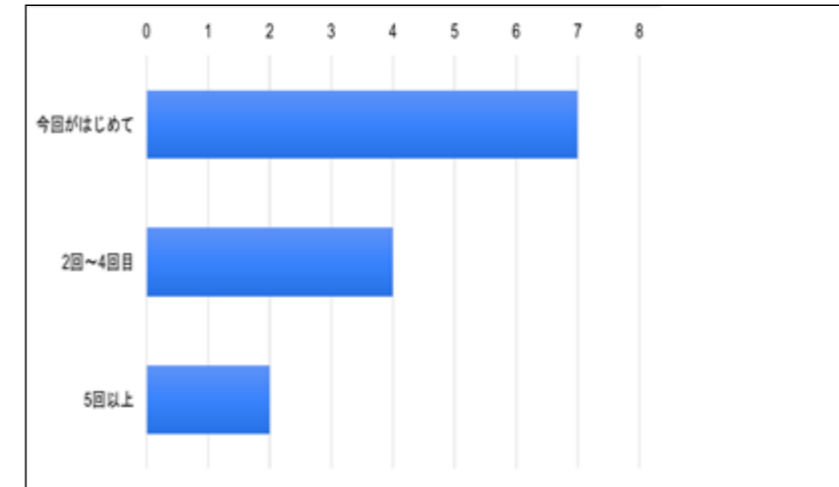
字幕の内容



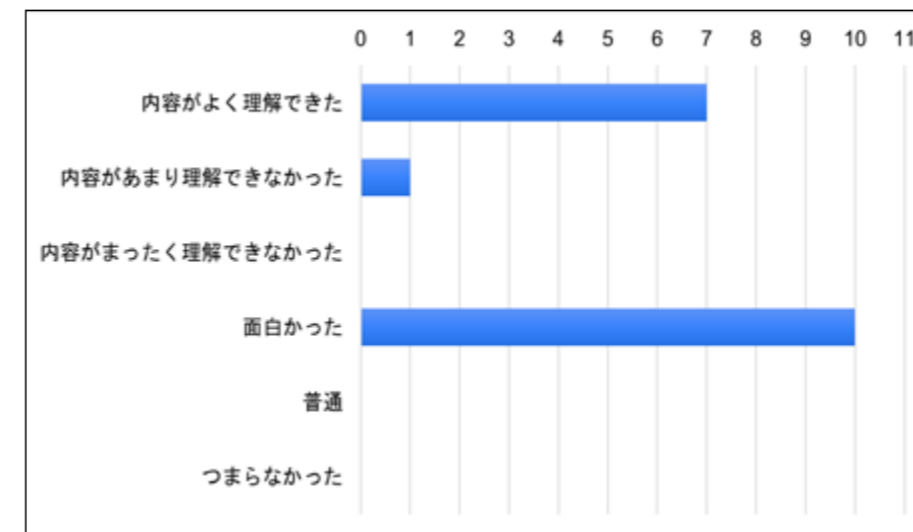
●お気づきの点、ご希望、ご意見、ご感想などありましたら、お聞かせください

- 開演直前、係員が客席で説明をしていたが、字幕機に表示されていたのかわからない
- お客さん全員に字幕機を使っている説明があるといい(少しだが明かりがでるため)
- 音声情報が1つの丸カッコ内に複数盛り込まれていた字幕があつたが、別々で音の発生と同時に出示してもらほうが良かったのでは？
- 字幕機の貸し出しだけでなく、その前後のサポート、手話通訳、どのサポートもとても嬉しかった。今後も今回の様なサポートを続けていただけたらありがたい
- 基本的にはとてもわかりやすく没入できた。舞台の作り上仕方がないが、話者が後ろを向いていたりすると、いまどの人が話しているのか分からず、探していると字幕を見逃してしまった。事前に、または鑑賞後に見逃した字幕を確認できるように台本共有があるとありがたい

今まで東京芸術劇場の音声ガイド・舞台説明会へ参加されたことはありますか。



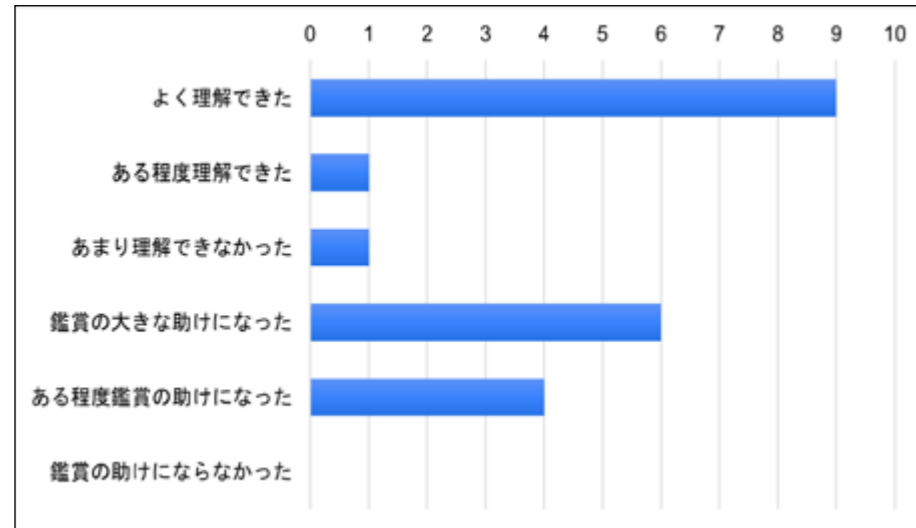
本日の公演は、いかがでしたか。



●公演の感想をお聞かせください

- 今っぽくてすごく楽しかった。思っていたよりかなり現代だった
- 古典歌舞伎と違って内容がよく分かった。こういうのもあるのだなという感じ
- 音声ガイドとても良かった
- ラストの義経がスポットライトを浴びて消えていくところが印象的だった
- 音響の振動が体に直に感じた。動きも想像できた

開演前および公演中の音声ガイドはいかがでしたか。(複数回答可)



●良かった点や、説明が足りなかった点を、具体的に、お聞かせください

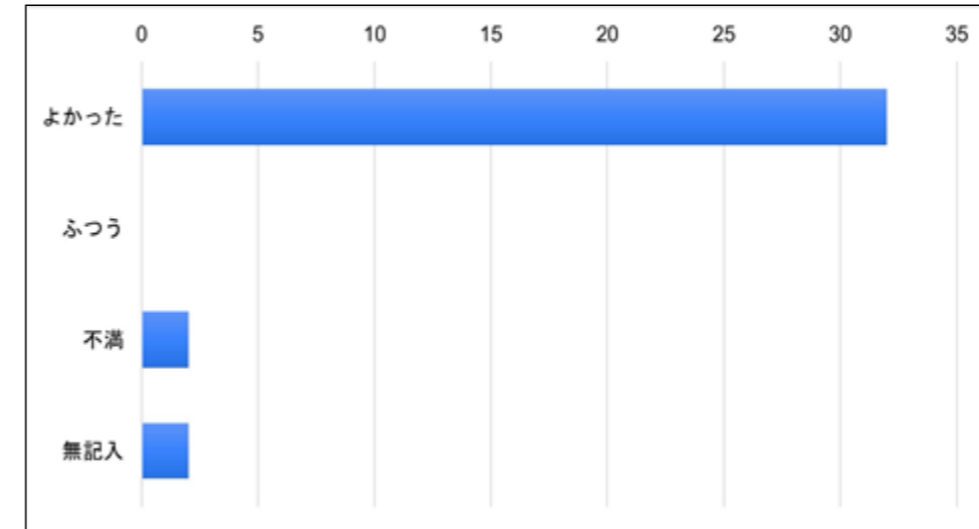
- 大きな効果音の時に解説の声が聞き取れなかった
- セリフがない、音楽のないシーンがわかりにくくイメージしにくかった
- 時々入る音楽の情景がかなり刺激的
- 耳にかけerイヤフォンのタイプが好ましい
- 登場人物の方の声があると良かった
- 音を大きくしないとわからない所があった
- 動きの多い演出だったので音声ガイドがあって良かった。わかりやすかった

●お気づきの点、ご希望、ご意見、ご感想などがありましたら、お聞かせください

- 最初のあらすじが良かった。スタッフの方々がとても親切だった
- アフタートークを聞いて良かった
- 音声ガイドの公演が多いとうれしい。今後も鑑賞サポートは続けてください
- またこういうステージを観たい

巡回公演 木ノ下歌舞伎『勸進帳』 字幕機提供

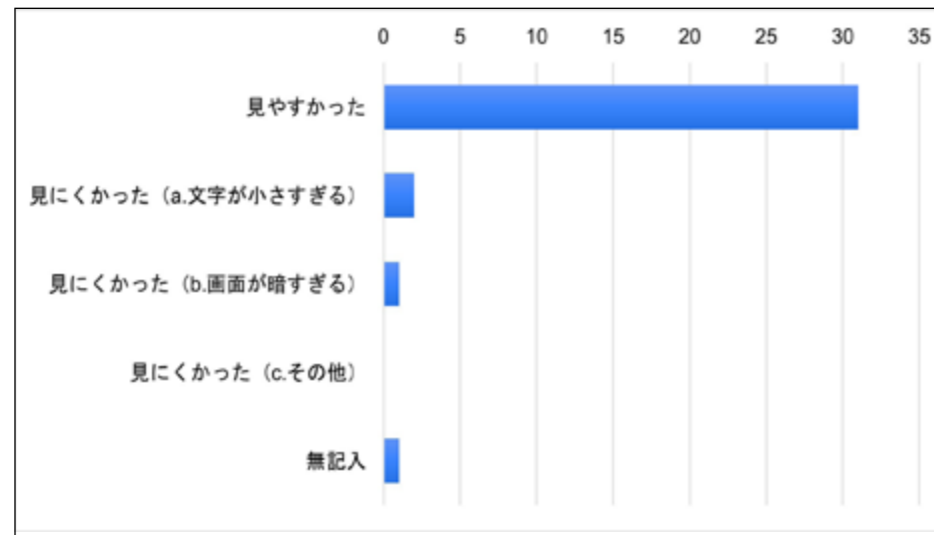
今回の公演は、いかがでしたか。



●公演の感想をお聞かせください

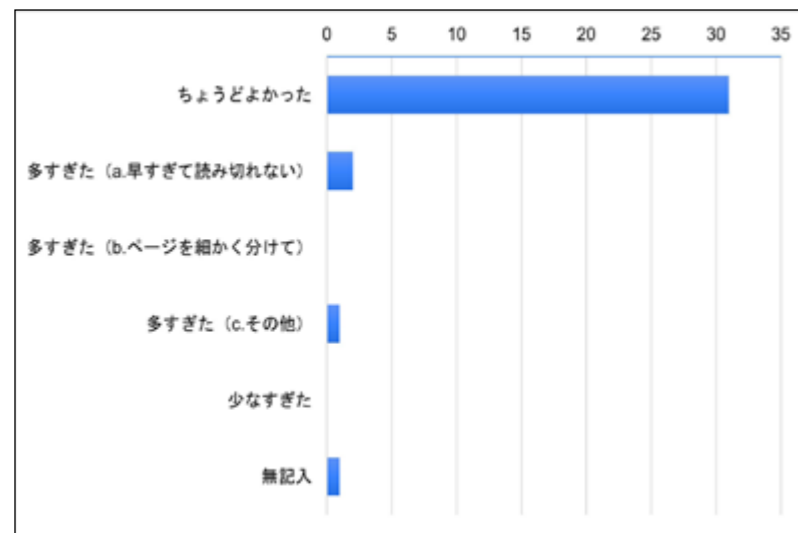
- 切り替えも素晴らしくわかりやすい照明、とても大きくて低い音響、役者の迫力のある表現、ポータブル字幕機を通してのわかりやすい台詞と文字情報、字幕機を持った上で見えやすい席の位置、最後の手話通訳付アフタートーク、様々なところにボーダーライン……。人生初の大変素晴らしい空間、時間で今でも余韻が残っている
- 字が見えにくく、(舞台と字幕を見るのが)難しかった面もあった
- 勸進帳を読むシーンでは難しい言葉がたくさん出てきたが舞台手話通訳は難しいし、限界があるのではと思った。こういうときこそ、字幕機は必要だと思った
- 字幕機の遮光シートのおかげで隣への光を気にせず集中することができた。ただ、ずっと90分持っている(膝にクッションを置いても高さ的に少し足りなくて)どうしても腕がつかれてしまうので、少し工夫できたらと思う。役者の方に向けて字幕機を動かせる点は良かった
- 字幕機のおかげで聴こえる人と一緒にライブ感覚で楽しむことができた。しかも歌舞伎を観る縁が無いと思っていた私が興味を持っていることに気づけた

字幕の文字は見やすかったですか？



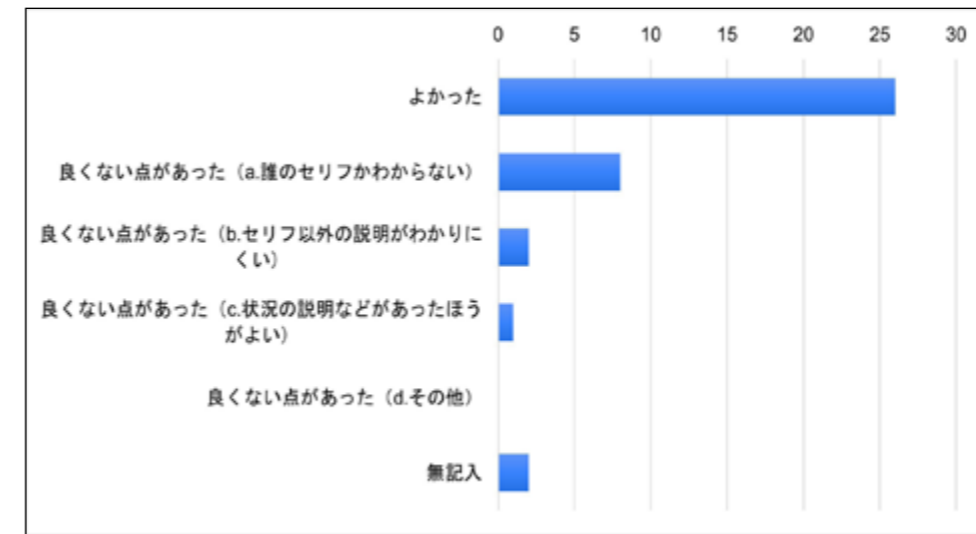
- もう少し文字サイズが大きくてもよいと思う。画面の明るさはちょうどよい
- 字幕の文字の表現(大きい声は大きい文字とか)があってよかった
- 白抜き文字が見やすく、フォントと太さ・大きさの表記はかなり良かった

字幕の文字数



- 音の雰囲気、何の音が説明しているのがよかった。文字化されていないものもあったが、逆にこれ以上増やさなくてもよいのかもと思った
- テンポもタイミングも良かった
- 表示速度が速すぎて読み切れなかった

字幕の内容



- 名前より人の顔の写真があったほうがわかりやすかったかもしれない
- オノマトペ(例えば雨の音ザーザー)があったら楽しめるかも
- 手話と日本語はニュアンスが異なり、作品内の日本・日本語特有の笑いのニュアンスが伝わった。手話では同じ内容をなかなか表出できないと思う

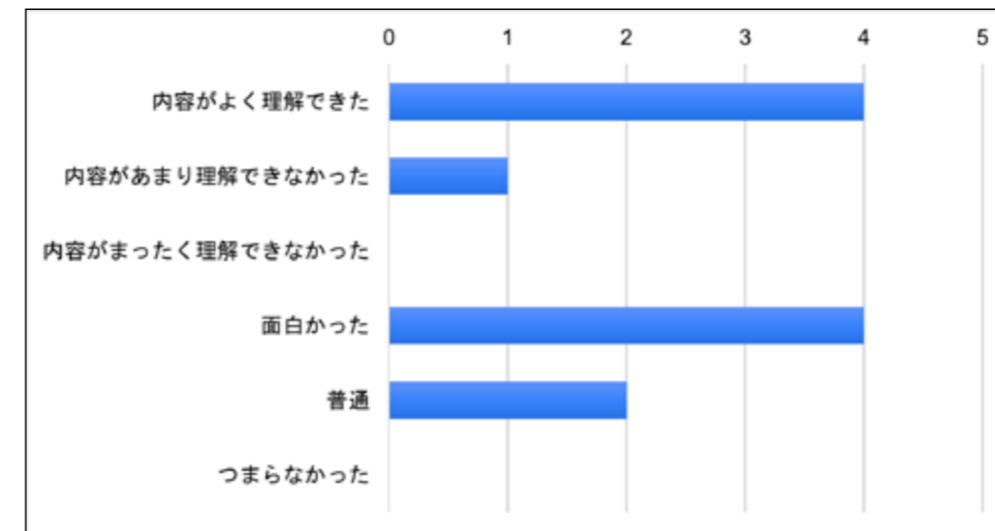
●お気づきの点、ご希望、ご意見、ご感想などありましたら、お聞かせください。

- ポータブル字幕機は舞台と同時に見ることが出来ない。文字を見るために舞台上が今どの場面なのか追うのが大変だった。セリフを言っている人が誰なのかわかりやすくしてほしい
- ポータブルは良かったが、動いている人を見たり、字幕を見るのに追い付けない場面があったので、ARグラスを活用しての観劇サポートも体験したい
- ヒアリンググループと字幕タブレットの貸出等を気軽に体験できるようにしてほしい
- 舞台の高さと字幕の高さが近いほど、首と肩への負担が少ないのと、話したり動いたりしている様子を同時に見ながら楽しめると思う
- 目線の移動をおさえるためには後ろの壁などに字幕を映すのがよい
- 声を出すとき、振動(お知らせ)があるとわかると思う。初めて使ったので慣れなかった
- 話者名の色分けがされていましたが、内容も同様の色に合わせたほうが良いと思った

- 機器を手を持っているのは90分が限度かなと思った。固定型よりもスマホの方が話者の動きに合わせて自由に動かせるのはメリットだ感じた
- アフタートーク(手話通訳付き)も楽しめた
- 京都関西圏でももっとこのような機会がほしい。他の方にも体験させたいと思った
- 聞こえない方にとっても有用なコンテンツだと思った。もっとたくさんの作品に触れてみたい
- 聞き取りづらかったセリフや歌詞をすぐに確認でき、理解が深まった
- 今回はじめて字幕のサポートを受け観劇することができ、とてもうれしく思った
- 目で楽しむことに加え、文字でも情報が得られて内容が理解できたように思う
- これからもぜひ続けてほしいです!!ファンになりました!次もあれば、友人や知人にもっと呼びかけたい

巡回公演 木ノ下歌舞伎『勸進帳』 音声ガイド

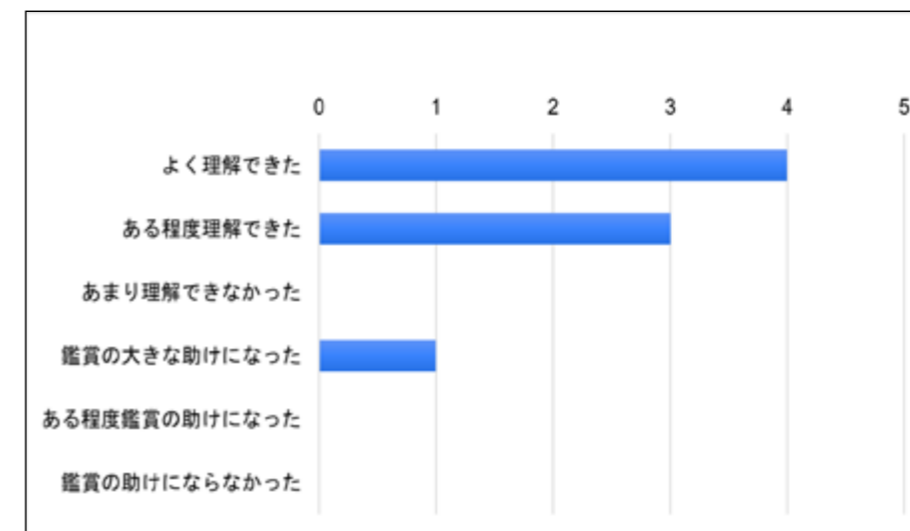
今回の公演は、いかがでしたか。



●公演の感想をお聞かせください

- 近くで見て迫力がありました。俳優さんが近くを通って顔が見えるようだった
- 初めての歌舞伎。長唄が印象に残った。演劇が好き。最前列で見られて良かった

開演前および公演中の音声ガイドはいかがでしたか。(複数回答可)



●良かった点や、説明が足りなかった点を、具体的に、お聞かせください

- 登場人物の心情まで説明があったのでわかりやすかった
- 本日の公演で初めて体験したので比較はできないが、楽しめた
- 音声ガイドは理解できましたが、話の展開についていくのが難しかった。現在と過去を思い浮かべるのに音声ガイドだけでは時間がかかった
- 音楽と音声ガイドが重なり、ガイドの音を上げると音が割れることがあったので、音楽と音声ガイドのボリュームとの関係をもう少し何か考えてもらいたい

●お気づきの点、ご希望、ご意見、ご感想などがありましたら、お聞かせください

- 全体的には今までにない舞台構成と音声ガイドがついている事。これから音声ガイド付きの舞台を増やしてほしい。また見てみたい
- 音声ガイドの取組をぜひ続けてほしい。ありがとう。劇場に1人で来ることで迷惑かけていないか気になってしまうけど……
- 木ノ下さんの「おしゃべり古典教室」を聞いていたので、公演を見ることができてよかった。他の木ノ下歌舞伎も見てみたいと思います。視覚障害者用のガイド、説明などとてもよかった。続けてください

まとめ 鑑賞サポートの波及に向けて

鑑賞サポートを実現し継続していくために

ひらかれた劇場になるための鑑賞サポート
— 芸劇職員の振り返りから

まとめ 鑑賞サポートの波及に向けて

劇場における鑑賞サポート付き演劇公演の開発と波及を目的に、木ノ下歌舞伎『勸進帳』東京公演と、全国6都市の巡回公演で鑑賞サポートを実施してきました。

プログラムを進めていく中で、鑑賞サポートの在り方は実施する劇場や作品の特性など様々な条件に合わせて対応することが必要で、その選択肢も多様にあることがわかってきました。そこでこの報告書では、鑑賞サポートが波及し、継続していくために必要な要素をまとめました。

鑑賞サポートを実現し継続していくために

1) 鑑賞サポートのパターン・選択肢を持つ

今回、全国各地の6つの劇場で鑑賞サポートを実施して、劇場ごとにホールの構造が異なり、人的、時間的、予算的、制度的にも様々な状況にあることがわかりました。鑑賞サポートにもできることとできないことがありました。作品の特性や、鑑賞サポートの運営主体が劇場か劇団かによっても事情が異なります。

そうした中で大切なのは、鑑賞サポートのパターン・選択肢を持っておくことだと考えます。鑑賞サポートの種類や特徴を知り、鑑賞サポートを行う目的や条件と照らし合わせて、最適なものは何かを実施の都度検討し、判断していくことが必要です。

2) 0か100ではなく、いまできることから

はじめから完璧な鑑賞サポートを目指そうとするのではなく、現状で取り入れられることを探し、いまできる小さな一歩から始めてみるのが大切だと思います。そこから次に挑戦することや、あるいは新たな課題が見えてそれをクリアするために動くことができるようになり、その繰り返しで自分たちならではの鑑賞サポートの在り方が明らかになってくるのではないのでしょうか。

3) お客様とのコミュニケーションが鑑賞サポートを育む

鑑賞サポートを行う時に、どうしても「障害がある当事者の方にご希望を聞いたら失礼じゃないか」「少しでも間違いがあってはいけない」という思考になりがちです。けれど、お客様が求めていることは個人によって異なるので、お客様ご本人に聞かなくてはわかりません。お客様に接し、対話し

て、できることを一緒に探っていく姿勢が大切です。

お客様とのつながりをつくる方法として、鑑賞サポート当日のコミュニケーションも大切ですが、コンタクトの窓口を工夫するのも有効です。たとえば電話のみの問合せ窓口は、聞こえづらい方にとってはバリアフルです。メールアドレスや問い合わせフォームを併せてご案内すれば、お客様からアクセスしやすい劇場になっていくのではないのでしょうか。

できることを一緒に探る

巡回公演の担当者から「お客様から点字パンフレットのご要望をいただいたけれど、どうすれば良いですか?」というご相談を受けました。お客様から声をいただくと、ご要望の通りにしなくてはいけないと思ってしまうがちですが、劇場にも予算や時間的な制約があります。

「いまあるパンフレットの中でできることを、お客様と一緒に探ってみてはどうでしょう」とお伝えし、パンフレットのテキストデータ(視覚情報を含めたパンフレットの全内容を文字データにして音声読み上げができるようにしたもの)を作ることになりました。結果として、お客様に喜んでいただくことができた、という嬉しい報告がありました。更に、他の見づらいお客様にもその情報を利用いただくことができたのだそうです。

4) 作品と鑑賞サポートの相性を見極める

「文化施設ならではの鑑賞サポート」という点では、作品との相性を見極めることもポイントです。鑑賞サポートの実施に向いている作品の傾向として、「出演者の人数が多すぎないコンパクトな作品」「既存の作品で大枠のストーリーが知られているもの」「照明や音響等の演出がわかりやすく、説明しやすいもの」「再演もの」などが挙げられると思います。今回の木ノ下歌舞伎『勸進帳』は、過去の映像を見てどのように鑑賞サポートを作ればいいのか検討できるうえに、多くの人知っている『勸進帳』をわかりやすく現代風にアレンジした作品であり、照明や音響の演出が印象的で、鑑賞サポートとの相性が良い作品だったといえます。

作品の内容について鑑賞サポート担当者以上に深く理解している公演の制作担当者と相談しながら検討することも大切です。

5) 鑑賞サポート推進役の動機が大切

木ノ下歌舞伎『勸進帳』巡回公演で初めて鑑賞サポートを担当した各劇場のみなさんからは、「この取組に関わってよかった」「担当者各個人が鑑賞サポートに興味を持ち、自発的に学ぶ気持ちは持続性を可能にしていく」「これからも続けていきたい」という力強い言葉をいただきました。「やらなければならないから」ではなく、鑑賞サポート推進の中心となる人が鑑賞サポートから生まれる価値や可能性を実感し、モチベーションを持てることで、その思いが周囲へと波及していくのではないのでしょうか。今回各劇場のみなさんとそれを共有できたことが、私たちにとってとても嬉しく多い機会となりました。

6) 劇場・劇団内を横断して巻き込む

今回、初めて鑑賞サポートを担当したにも関わらず「それほど大変ではなかった」と振り返る劇場には、周りの部署等とうまく連携できていたという特徴がありました。鑑賞サポートを実施するには、様々な人、部署の理解と協力が不可欠です。

鑑賞サポートの担当者一人が最初から最後まで頑張るのではなく、様々な部署を横断的に巻き込むことで、劇場全体からの理解を得られ、実施体制を整えやすいと思います。

理想としては、鑑賞サポートチームからの発信ではなく、公演の全体を見ている人（プロデューサーや演出家等）や制作担当者が、「この作品で鑑賞サポートをやりたい」と言ってくれるような状況になると、より充実した鑑賞サポートができると思います。

7) 体験する

「世の中には色々な特性の人がいて、みんなが楽しめる公演にするためにはどのような配慮や思いやりがあると良いか」という想像力や想いを、作品を創る時に持つことが、鑑賞サポートの根底にあると良いのではないのでしょうか。

そのためには、鑑賞サポートを制作する人たちが、実際に体験してみないことには始まらないと私たちは考えています。言葉で「鑑賞サポートが大事」と言われても、どのような意味でこの取組が必要なのか、どのようなサポートをすればより多くの人を楽しめるのか、自分で体験し、感じないとわかりません。

数年前に比べると、鑑賞サポートを体験できる機会が増えているので、実施している劇場や劇団の鑑賞サポートを見学や体験しに行ってみてはいかがでしょうか。何度か見る機会があると、自分たちに何ができそうか、どのようなサポートが適しているかがわかってくるのではないのでしょうか。

8) 鑑賞サポート以外のサポートを整える

鑑賞サポートを実施すれば良いということではなく、多様な方々を迎えるための体制を考え、整える必要があります。

見えづらい方は劇場までどのようにお越しになるのか、劇場内はどのように案内すれば良いか、聞こえづらい方とはどのようにコミュニケーションをとるのか、情報の届け方やチケットの販売方法、緊急時の対応等、鑑賞サポートを利用する前後のサポートも含めて劇場全体で想像し、検討することが必要です。

鑑賞サポートには、劇場内の様々な部署が関わることになるので、施設の案内、劇場の管理やアクセシビリティに取り組むなど、様々な側面でサービスの見直しや向上の機会になると思います。

ひらかれた劇場になるための鑑賞サポート — 芸劇職員の振り返りから

プログラムを終えて、企画・運営を担った東京芸術劇場職員の間で振り返りを行いました。今回のプログラムを通して、東京芸術劇場がこれまで取り組んできた鑑賞サポートの在り方を見つめ直すとともに、鑑賞サポートが果たす役割についても改めて考える機会となりました。ここでは、振り返りであった東京芸術劇場職員の気づきをまとめました。

鑑賞サポートを波及するためにできること

今回は、東京公演で実施した鑑賞サポートを巡回先の公演でも実施するという方法をとりましたが、今後、各地の劇場が鑑賞サポートを一から企画・制作し、実施しようとした時に、また新たな課題が見えてくると思います（東京芸術劇場もそうでした）。座談会で「劇場単独ではなく東京芸術劇場と連携して実施できたことが大きかった」という声が多く出ました。東京芸術劇場が鑑賞サポートを続ける中で、鑑賞サポートを始めてみたいという劇場や劇団から相談を受けたり情報を共有したりする機会も増えてきました。鑑賞サポートの提供を行う事業者と、鑑賞サポートを行いたいと考える劇場や劇団の間をつなぐなど、中間支援のような取組の可能性についても公共劇場として考えていく段階にあるかもしれません。

鑑賞サポートはひらかれた劇場になるためのツール

巡回先の各劇場職員との座談会で、「鑑賞サポートの体験をしてくださった聴覚障がいのある方が、公演が終わってから劇場に遊びに来てくれた」というお話がありました。

鑑賞サポートを通して、はじめは意図していなかった来場者との関係性が生まれ、劇場が地域にひらかれたコミュニティの場になったのだと感じました。

鑑賞サポートを行うことがゴールなのではなく、鑑賞サポートはその先にある多様な人々をつながり、ひらかれた劇場を生み出すためのひとつのツールでもあるということです。鑑賞サポートの取組などを通じて、地域の様々な人や団体、これまでアクセスできなかった人や縁がないと感じていた人ともつながって、新たなコミュニティが育まれていく。そこから関わる一人ひとりの意識が変わることで、より豊かな劇場になっていくのではないのでしょうか。多様な人が「自分の劇場だ」と思える場こそ、本当の意味での劇場なのだと思います。

また、多様な人の来館が増えると、劇場全体の気づきにつながり、必然的にアクセシビリティを整備していくことにも目が向いていきます。

多様な人が来館できる、よりひらかれた公共劇場になっていくための鑑賞サポートを、これからも劇場や劇団のみなさまと連携しながら思索していきたいと思います。

おわりに

最後になりますが、本プログラムは、木ノ下歌舞伎主宰の木ノ下裕一氏の協力なくしては成り立ちませんでした。劇場の声に真摯に耳を傾け、鑑賞サポートにおいて重要な字幕や音声ガイドの制作に大変な時間を割いてくださったこと、作品に関わる俳優やスタッフにも鑑賞サポートの必要性を伝え関心を喚起してくださったことで、カンパニー全体で鑑賞サポートに取り組む体制を整えてくださいました。この場を借りて、木ノ下さんに感謝申し上げます。また、鑑賞サポートを実施したすべての巡回先に同行し、その全公演で字幕、音声ガイドの制作をしてくださった株式会社イヤホンガイドの皆様、稽古から試行錯誤を重ね音声ガイドを制作してくださった持丸あいさんに感謝申し上げます。

この取組を経て、「鑑賞サポート」は障害を持っている方のためだけではなく、私たちが長く作品を鑑賞したいと思った時に、年齢を重ねて耳が聞こえづらくなったり、目が見えづらくなったり、足が悪くなったりしていても鑑賞をあきらめるのではなく、誰もが鑑賞したい時に楽しめる環境を整えるためのものという想いが一層強くなりました。

この報告書が、鑑賞サポートを導入したいと考えている劇場・劇団や関わる人々にツールとして活用され、障害の有無にかかわらず、すべての人が舞台芸術を楽しめる環境の整備につながるきっかけに少しでもなればうれしく思います。更に、施設のアクセシビリティに取り組む方々の参考となれば幸甚です。

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
事業企画課 事業調整係 社会共生担当
多田 和代

鑑賞サポートがひらくより豊かな劇場の可能性 報告書
クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー パートナープログラム
巡回公演における鑑賞サポートの波及に向けた検証

企画・運営 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
多田和代 三谷淳 佐藤宏美 黒木裕太
鑑賞サポート 株式会社イヤホンガイド(字幕制作、ポータブル字幕、音声ガイド操作)
持丸あい(音声ガイド制作、ナレーター)
協力 木ノ下歌舞伎
那覇文化芸術劇場なはーと、サントミュージゼ(上田市交流文化芸術センター)、
岡山芸術創造劇場、山口情報芸術センター、水戸芸術館、京都芸術劇場 春秋座
Palabra株式会社
編集・執筆・制作 平原礼奈

発行日：令和6年3月22日
発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073
東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス5階
電話：03-6256-8435

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。

©Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーとは
乳幼児から高齢者まで、障害のある人もない人も、そして海外にルーツをもつ人たちも、だれもが文化施設やアートプログラムと出会い、参加しやすいように文化芸術へのアクセシビリティ向上に取り組むプロジェクトです。

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
<https://creativewell.rekibun.or.jp>



Open Access to Culture Project

東京都



東京
芸術
劇場

Tokyo
Metropolitan
Theatre